

意識の転回

塩川香世



はじめに

あなたは、「意識の転回」という言葉を、耳にしたことがあるでしょうか。

そもそも、「意識」という言葉を、あなたは日常的に使っていますか。「何かを意識する」とか、あるいは「意識を変える」とかいうふうに、使われているかもしれません。

しかし、「意識の転回」という言葉は、どうでしょうか。なじみが薄いと思います。「意識の転回」とは何だろうか。初めて聞いたと思われる方もあるでしょう。

確かに聞き慣れない言葉です。そこで最初に断っておきます。

約二十数年前から、あるセミナーが開催されてきました。そして、そのセミナーのテーマは、こうでした。

「私達人間の本当の姿は目に見えません。肉体という形は私達人間の本当の姿ではありません。私達は、意識、エネルギーとして永遠に存在しています。」

このテーマについて、田池留吉氏という人を中心に、セミナーが主に日本各地で開催されてきました。

「意識の転回」という言葉は、そのセミナーで使われてきた言葉なんです。

セミナーでは、「意識の転回」とはどういうことなのか、「コペル

ニクスの転回」を例にとつて何度も説明がありました。

太陽が地球の周りを回っているという考え方（天動説）と、地球が太陽の周りを回っているという考え方（地動説）とでは、全く違います。

このように、「意識の転回」とは、考え方の根本を一八〇度変える、転回をすることだと思ってください。それは、ただ単に意識を変えらるというのではなく、物の見方、考え方の土台を全く変えるということなんです。

では、物の見方、考え方の土台を全く変えるとはどういうことなのか、どうしていくことなのかということ、これから語っていきたいと思います。

田池留吉氏は、「目に見えて、耳に聞こえて、手に触れることができる形ある世界がすべてだ。そこに人間の喜びと幸せがある」とする物の見方、考え方を天動説に見立て、「いや違う。そういう世界はいずれ消え去る世界であり、私達人間の本当の喜びと幸せは、そのような世界にはない」とする物の見方、考え方を地動説に見立てました。

そして、私達人間は、この天動説から地動説への転回を自分の中で起こすために、生まれてくるんだと語りました。

「人間の本当の喜びも幸せも、そして、人間という存在そのものも、『意識の転回』なくして、分からない。」

これが学びの中心部分でした。

ところで、「私達は、意識、エネルギーとして永遠に存在しています」と言われても、それは、一体どういうことなのか、そう簡単には分からないし、納得できないと思います。

今、現に、肉体という形を持つているのに、それが私達の本当の姿ではない。つまり、偽物だと思うことは、無理というものです。

確かに世の中には、心が敏感で色々なことを感じる人はいます。昔から、れいこん霊魂と通じ合うとか、れいぼい霊媒とか、そういうことはあつたようです。今は、さしずめ何とかのパワーでしょうか。とにかく、目に見えない世界、形がない世界のことを語ってきた人は、昔から存在していました。だからといって、その人達が、目に見えない世界、

形がない世界を本物だと思ってそうしてきたのかと言えば、そうでもなさそうです。それどころか、そういう人達ほど、実は危険なのです。

なぜか。

それは、まだ、自分の中で、「コペルニクスの転回」が始まっていないからです。その人達は、目に見えない世界、形がない世界を語っておきながら、自分自身については、今、肉体を持っている自分が自分だと思っています。当然、その人達の物の見方、考え方は、形の世界を本物とする土台の上にあります。その土台の上で、様々なことを感じ、やっているに過ぎないだけで、いいえ、それどころか、そうしているうちに、段々雲行きがおかしくなっていくのです。

雲行きがおかしくなるというのは、例えば、俗に言う敏感であつて、一般の人には見えないものが、その人には見えたり、聞こえないものが、その人には聞こえてきたりしたときに、その処置を誤れば、間違いなく病院行きか、何か事件かトラブルを起こすだろうということ です。

いいえ、それ以上に、大きな間違いを犯してしまうのです。何かを感じるがゆえに、人を導いていこう、救つてあげよう、私には大きな使命があるという大それた間違いを犯しやすいのです。その人達は、何かを感じるがゆえに、その目に見えない、形のない世界をもっと知ろうとしていくし、もっと知りたい、もっと語っていきたいと思うのでしょうか。人には見えないもの、聞こえないことが見え

て聞こえて感じてくれば、自分は特別だから、素晴らしいからそうなるのだと思つていくのです。そして、自分には大きな使命があると大真面目おまじめに思つてしまい、人を導き、救うことが良いこと、正しいことだと思つてしまうのです。

その通りです。形の世界を本物だとする土台の上からは、なぜ人を導き、救つていくことが間違いであるのかは、絶対に分かりません。また、大きな使命がある人など存在しないという点についても、納得できないし、本当にそうなのかは、絶対に分からないでしょう。

分からないどころか、それが己を掲げる思いであり、己を表す思いであるなどとは認めることはできません。ましてや、自分がどれほどの悪臭を放っているのかなど、到底認めることはできないはず

です。

しかし、形の世界を本物とする土台からは、間違いなく悪臭、真つ黒なエネルギーが噴き出しているのです。そして、その悪臭、真つ黒なエネルギーが、様々な現象を起こしていくのです。

さて、ここで話を戻します。

セミナーが開催されて、二十年以上の年月を経てきました。残念ながら、現実には、その中心部分である「意識の転回」がなかなかなのです。

なぜだと思いますか。そして、なぜ、「意識の転回」がなされなければ、本当のことは分からないのでしょうか。

「私達の本質は、意識です。」

「誰も何も救うことはできない、自分を救うのは自分です。」

これは、セミナーで言い尽くされてきたもんごん文言もんごんです。

同じようなことを、どこかで耳にされたり、目にされたりした人もあるかもしれません。

しかし、人間を形あるものとしてとらえた土台から発せられた言葉と、人間は形ではないとする土台から発せられたそれとは、語る文言もんごんは同じでも、その中身が全く違うことが分かるでしょうか。

そのことを含めて、「意識の転回」が、すべてのキーワードだということを、私なりに語ってみますので、少し、時間をください。

意識の転回

〔目次〕

はじめに

- 1 「意識の転回」は難しい?! 18
- 2 形の世界を本物とする土台 27
- 3 自分の中の自分 40
- 4 他力のエネルギーが染み付いています 53
- 5 間違っているものは、いずれ音を立てて崩れていきますが、
今世はその手始めと思ってください 61

- 6 間違いだらけの人生 66
- 7 自分にこよなく愛され、許されて、今がある 69
- 8 幸せを感じたいなら…… 74
- 9 自分に聞いてください 79
- 10 自分とトコトン付き合ってください 85
- 11 生き様に優劣は付けられない 90
- 12 真の意味で、強い人間でないと、
真実を追究していくことなどできません 95
- 13 母を通して 101
- 14 握にぎっているものを離すことが人生でした 112
- 15 あなたが欲しいものは何ですか 117

16	苦しんできた自分のために、どれだけ力を尽くしてきたか	121
17	私と私の約束	128
18	時が来たれば	135
19	意識を転回すれば、もちろん、人間としても成長します	138
20	平々凡々ながら、我が道を行きます	142
21	まとめ	149
22	次元移行へ向かって、ともに歩みを進めてまいりましょう	163

1 「意識の転回」は難しい?!

先ほど、「意識を変える」という言葉を挙げましたが、それは、一般的に、自分の思いを変える、物の見方、考え方を変える、そのように理解されているだろうと思います。

そうは言うものの、自分の思いを変える、考え方、物の見方、価値基準を変えるところは、口で言うほど容易たやすいものではありません。一時的に、何かしら、自分の中が変わったことを感じて、人間の心は、そう簡単には変わらないと考えるほうが妥当でしょう。もっと言えば、人の思い癖、心の癖は、そう簡単に変えることな

どできないということだと思えます。

喉元のどもと過ぎれば熱さを忘れるとか、または、元もとの木阿弥もくあみという言葉にもあるように、思い癖とか心の癖は、なかなかしぶといものがあります。文字通り、「癖」ですから、ある時期を通り過ぎれば、また元に戻っていることのほうが、多いのではないのでしょうか。

さて、人間の心が、そう容易たやすく変わらないのと同様に、「意識の転回」というのも、大変難しいものだと考えてください。それは、ただ単に、「意識を変える」というものではありません。確かに、物事のとらえ方、見方、価値基準、判断基準を変えていくことに違いはありませんが、「はじめに」のところでも触れましたように、「意識の転回」とは、その基準となる土台を全く、つまり、百八十度変えることを

言います。

いくら、見方、価値基準を変えても、土台が同じでは、それは、「意識の転回」とは、全く違うもの、全く別物なのです。

たとえば、九死に一生を得た体験から、人生観、世界観、価値観、それらのものが、自分の中で一変したと感じられても、果たして、それが「意識の転回」という次元のものになり得るかと言えば、私は、疑問だと思えます。もつとはつきりと言うならば、それは、「意識の転回」とは、似て非なるものなのです。

九死に一生を得た体験、あるいは、目から鱗うろこが落ちるほどの体験というのは、今まで自分はどう思ってきたけれど、これからはこのように思っうながて生きていこうと、かなり大きな決意を、その人に促し

ていくものに違いありませんが、仮に、そういう体験、経験がある人であれば、今世、その人は何らかのルートで、今頃は、きっと、この学びに集われていると思います。学びに集われて、そして、それこそ、目から鱗うろこが落ちる体験をどんどん積み重ねられて、ぐんぐんと真実の世界のほうへ、心を向けていかれるようになっていないのではないかと、私自身は思っています。しかし、残念ながら、ただそういう人には、出会っていません。

ということは、今、自分が体験した出来事により、たとえば、その人が目から鱗うろこが落ちたような感覚になって、さあ、ここから私の再出発だと思っても、私がお伝えしようとしているスタートとは違っているのだと思います。

一命に関わるような出来事に出会って、九死に一生を得た命だから、生まれ変わった気持ちでやっていこう、頑張ろう、そういう人生における転機が訪れても、それが、果たして、「自分の土台を変えていくほどの衝撃を伴う転機」になり得るのかと言えば、なかなか、それは難しいと思います。もちろん、「この肉体は自分ではない」とする思いが、一直線に自分の中に入ってくるほどの衝撃というのは、そうざらにはありません。あるとするならば、それは、やはり、「人の生き死に」が、関わってくると思います。それも、単に自然消滅的なものではなくて、ある日突然に起こってくるものによって、もたらされる場合とさえ、察しが付くでしょうか。従って、「人の生き死に」以外では、目から鱗うろこが落ちる体験が、自分の土台を変えて、

そこから自分をスタートさせることは、はつきり申し上げて難しいと、私は思っています。そして、スタートが違っていれば、あとは当然違ってくる。最初の第一歩を訂正することなしに、どれだけの時を重ねても、その結果は……ということになるでしょう。

自分自身は、目から鱗^{うろこ}が落ち、生まれ変わったと思ってみても、土台が同じなら、五十歩百歩の世界だと、私は思っています。「意識の転回」とは似て非なるものだと考えていただいていると思います。しかし、世間では、そういう話は、堂々と通じます。いいえ、そういう話こそが、人々の共感と呼び、感動を巻き起こしていくのでしょうか。

「心が洗われるようだ」「何とも感動いたしました」「清々^{すがすが}しい思い

に出会いました」「私は生きる勇気を頂きました」「大いなる励みになります」「私も頑張つていきます」

そのような様々な声も聞かれるでしょう。

その話の中に、形の世界を土台にして生きていけば、そうだと共鳴できることは多々あるとしても、土台が違う世界からは、決してそうはなりません。先ほど、五十歩百歩と言いましたが、みんなまとめて十把じゅっば一ひとからげです。「括ひらりにまとめて、地獄へまっしぐら、それが現実だと私は思うのです。

二十年学んできても、難しいです。一口に二十年と言いますが、二十年は長い時間だと思いませんか。その間に、どれだけのセミナーの回数を重ねてきたでしょうか。

日本全国、そして、アメリカ、韓国にまで、足を伸ばして、セミナーが開催されてきたのです。

もちろん、セミナーに参加された人達は、熱心に学ぼうと思つてこれたに違いありません。学ぶ動機やその他、様々な障害となるものがあつて、一足飛びにはなかなか進めなかつたことは事実だつたとしても、ここにしか真実はないことを、心のどこかで感じてこられたから、二十年続いてきたのだと思います。

それでも、なかなかという感があります。ましてや、学びをしていない人に至つては、こういうお話を耳にしても、全く素通りしてしまうのが実際のところだと思えます。

私は、だから嘆いているわけではありません。まだまだ時間がかか

ることを承知で、しかし、私自身の心で感じていることは、決して揺るぎのないことだから、難しいのも分かりつつ、また、このようにパソコンのキーを叩きたくなるのです。

そこで、大変難しく、難行苦行ばかりを強調しても仕方ありませんので、例えば、私という事例を挙げさせていただいて、この先のページを進めていきたいと思いますので、もう少し、お付き合いください。

2 形の世界を本物とする土台

「自分の土台とは何なのだろうか。」

「自分の土台を変えらるとは、どういうことなのか。」

学びを知らなければ、そのようなことを思うことは、まずないでしょう。

しかし、ここで、あなたも一度、思ってみてください。

まず、その前に、土台というのは、次の二つがあると考えてください。

一つは、目に見えて、耳に聞こえて、触れることができる形の世界が土台となっている場合です。そして、もう一つは、形は何もな

いけれど、心で感じることができるとして世界を土台としている場合です。

ほとんどすべての人が、今現在、形の世界を本物とする土台の上で生活を営んでいます。特段の意識をすることなく、目に見えて、耳に聞こえる形ある世界を、現実の世界だと思っています。その中で、夫婦や親子をやっています。また、会社の社長や政治家、その他様々な仕事に携わ^{たずさ}っている人、そうでない人と色々ありますが、みんな、形の世界を本物とする土台の上でやっています。

また、私達は、今、現に持っている顔形や身体的特徴から、他人と自分とを区別しています。私達には、それぞれに姓名が付けられています。あの人とこの人は別人です。このように、人間を形ある世界から見る土台の上で、すべてが成り立っています。人間社会とは、

そういうものです。

私達は、人間を形としてとらえ、いいえ、人間に限らず、自分の周りのものすべてを形の世界からとらえて、その中で、自分達の幸せと喜びを追求していこうとしてきましたし、今もそうです。

現代社会において、幸せと喜びを一番端的に表現するものが、お金ということになっています。この土台の最大の特徴は、金銭至上主義です。

人は、お金を手にすれば、万事うまくいくと思ひ込んでいます。だから、お金のために、日々、争いは頻繁ひんぱんに起こり、それが、犯罪や不祥事にまで発展していくことも珍しくありません。

また、主義主張を述べ、正論を唱え、奇麗事を言つても、最終的には、

お金をよこせ、いくらくれる、どんな保障をしてくれると、裁判を起こしたりしています。

今はそのような世の中です。結局、すべての問題の中心はお金だと、そろそろみんな気付いておられるだろうと思います。だからといって、お金で何もかも解決するわけではないし、それが全面的にいいとも思っていないけれど、やはり、お金については、誰しもが関心があり、今の世の中において、決して、それを無視することはできないということでしょう。

いいえ、無視するどころか、お金こそすべて、金、金、金、お金さえあれば何でも手に入れることができる、幸せになるにはお金が必要だと考えている人が、圧倒的に多いと思います。それが現代人、

文明人ということでしょう。

もし、お金で買えないものがあるとするならば、真心だとか、人の情けだとかいうものでしょうか。しかし、それさえも、今に至っては危ないかもしれません。そこには、絶対にお金が動かないのでしょうか。

最初は、真心も純粹かもしれません。最初から騙だましてやろうという思いはなくても、段々に、お金がチラチラと見え隠れしてきたならば、その人達の結びつきは、どうなっていくのでしょうか。「札束に自分の魂は売らない」なんて、カッコイイことを言っても、形を本物とする土台の上では、それは難しいことなのではないかと思えます。それどころか、人との結びつきの中には、「金の切れ目が縁の

切れ目」を堂々と地で行く場合も、多いと思います。

また、永遠の命も、お金で買えないものです。しかし、お金があれば、救える命があることも事実です。お金がある人は高度な技術の治療を受けることができ、そうでない人はできない、そうなつてくると、命の重みでさえも、金次第です。

形ある世界では、命を救うことや、命拾いをすることに、大きな意義があるようです。従って、命を助けることができなかつたりすることを、どうしても暗く受け止めてしまう傾向にあります。

「命あつての物種」ものたねこの言葉、この思いこそが、形の世界を本物とする土台を物語る極め付けだと思います。

また、形を本物とする世界の、もう一つの特徴として、戦争とい

うものが永遠に続いていくことが、挙げられます。どんなに平和を望み、みんな仲良く豊かにと願ひ、話し合いの機会を持ち、解決策を模索しても、その土台の上では、戦いのエネルギーを消し去ることは、残念ながら不可能です。

ここで言う戦争とは、何もミサイルや銃などで、一瞬のうちに人命を奪うという、いわゆる戦争だけを指しているではありません。そもそも、実際に人を殺すから、そこが戦場となっているのではなくて、戦いの場は、人の心の中にあります。相手を非難、攻撃、破壊するエネルギーを、心の中からどんどん流す、それが、戦うことを指します。

形を本物とする心の中は、絶えず戦いのエネルギーを流している

と言つても、言い過ぎではないはずですよ。

平等を唱えても、形の世界は不平等です。顔形から何から何までみんな同じということはあり得ない、形だから不ぞろい、色々あつていいのです。色々とあつて当たり前で、色々あるから、様々な思さくそういが錯綜して、心の醜みにくさを感じていくことができますが、形を本物としていては、そのようにとらえることができません。

地位、名譽、財産のある人、ない人、元気な人、病弱な人、頭の回転がいい人、そうでない人、色々あつて当たり前です。しかし、現実には、より幸せになろう、豊かになろう、輝かしき人生を送ろうという願望が皆さんの心の中にあります。だから、経済力が豊富で、切れ者で、しかも健康でというのが幸せの第一条件になるのです。

また一方では、生活空間が豊かになればなった分だけ、潤うるいが削そがれていくことを感じる人もあると思います。

そうすると、人々の欲望が集まる都会生活から離れて、どこか田舎にでも引きこもって、自然とともに生活をすればいいのでしょうか。そのようなことをしても、心の中の戦いは止めることはできません。殺伐さつぱつとした中で生活をしようが、のどかな中で時を刻もうが、結局はその人の心の世界の問題です。いずれは、それが形になって現れてくるのです。

人もまばらで穏やかな田舎でも、犯罪は起きます。隣に住む人が誰か分からない都会も奇妙ですが、古い風習やしきたりが残っている田舎も閉鎖的で、案外、心が屈折しているのかもしれない。

要するに、どこで生活を営んでも、心の闇の部分が噴き出してくるようになっていくのです。形を本物とする思いが、間違っているからです。間違いは、いずれ必ず正されます。

また、形あるものを、永遠にそのままの状態で保存しておくことはできません。形あるものは、いずれ崩れ去り、消え去っていくのです。それは、形の世界が虚像の世界だということを、はっきりと指し示しているのではないのでしょうか。しかし、人は、虚像の世界にしがみつき、自分のすべてを費やしていく過ちを犯してきました。崩れ去り、消え去る虚像の世界に、せつなてき刹那的なえいようえいが栄耀栄華を求めていく人間の哀れさを感じずにはいられません。

ところで、人の心の中の戦いを一番分かりやすい形で示している

のが、今もどこかで武器弾薬が飛び交って、人があつけなく死んでいく生々しい現実です。そこでは、神の名のもとに正義を振りかざして、人殺しをしています。

何が、聖戦なのだと思いますが、しかし、それが今の人間の心の世界の実態だと、私は思っています。

国と国、民族と民族の争いから、夫婦喧嘩に至るものまで、人間は絶えず、戦いのエネルギーを流し続けています。

互いに主義主張があります。言い分、立場があります。

条件付きの譲歩で、何となく和解は成立したように見えても、中はくすぶり続けています。和解したからといって、相手を攻撃するエネルギーは、消えて無くなったわけではありません。まだまだ、

相手を攻撃するエネルギーが満ち溢あふれている中にあります。だから、どんなに幸せになろう、豊かになろうとしても、無理なことなのです。それは、今、実際に世間で起こっている事件や事故などによっても、毎日、毎日、私達の目の前に、はつきりと示されています。

そろそろ、おかしい、何かおかしい、みんな狂っているのではないかと気付いてこられてもいいたいようなものです。しかし、形を中心に据すえた土台は、まだまだこんなことくらいでは、崩れ去ることはないでしょう。それほど堅固な土台を、私達は築いてしまいました。それもその通りなのですが、揺るぎのない堅固な土台だと思いう思いもまた、本当は違っています。

だから、そのことを、これからの時間をかけて証明していく方向に、

粛々しゆくしゆくと流れていき、確実に、形を本物とする土台は崩れていくので
しよう。

2 形の世界を本物とする土台

3 自分の中の自分

人間を形あるものとしてとらえてきた時間は、ほくだい莫大です。

従って、「いいえ、違います。私達人間の本当の姿は目に見えないものです」と、このようなことを、いくら言われても、それだけでは、誰も、おいそれとは納得などしないし、できません。

ただ、そうであっても、人は、心の世界という目に見えない世界は確かにある、または、あるかもしれないと思っただけではないのでしょうか。なぜならば、誰しも、自分の中には色々な思いが出てくるからです。

色々なことを思う場所が心だということに、異論はないと思います。そもそも、心とは、一般的に、目に見えないものだと理解されています。その心の持ち主は、あなただと言われたら、それは、何となくそうだと思うでしょうし、否定はしないと思います。しかし、心の持ち主は自分であつても、その心そのものが自分であり、自分は心以外の何物でもないということまでは、なかなか行き着かないのです。心と自分が、イコールで結びつかないのです。なぜならば、心は、目に見えないもの、自分は、目に見えるものだと思っっているからです。

心というものはあるにはあるが、まず、その前に自分があります。そして、自分というのは、例えば、身長がこのくらいで、体重はこ

のくらいというふうには、誰の目でも確認することができるものと思
っていますから、やはり、外目を気にします。つまり、心は外に向
きます。思いは外に向きます。人の目も気になるし、時流に乗り遅
れてはいけないということで、情報収集、情報交換に、エネルギー
を消費していきます。その結果、心は外に向き続け、常に比較対照
の中で、心は疲れてしまいます。当然、安らぎたい、癒いされたいと
いう欲求が高まってきます。それがうまく発散されなければ、スト
レスが重なって、自分の身体からだや人間関係に悪影響を及ぼすと考えら
れています。それはそうだと思います。

そこで、外に向いている心を、自分の内に向けてみてはどうでし
ょうか。色々なことを思う場所が心だということだから、その心と

いうことに、もっと自分の思いを向けていくのです。それが心を自分の内に向けるということだと思ってください。

そもそも、心を自分の内に向けるということがよく分からないのは、心というものは、外に向く習性があるからです。

とにかく、自分の判断基準は、いつも外です。人の目を通して映る自分を見てしまうのです。自分の目を通して自分を見ることをしませんが、それでは、自分の中の自分の存在など、知る由もありません。だから、「心そのものがあなただ」と言われても、訳が分からないし、ましてや、「人間の本当の姿は目に見えない」なんていうことを、俄かに受け入れることなどできません。何を言っていると鼻であしらっていくのが関の山です。

反発する人や、無視する人はいても、「はい」と、すぐさま受けていく人は、おそらくいないでしょう。それが通常だと思えます。それは、どなたの心の中も、たくさんの過去からの自分がひしめき合っている状態であって、そのたくさんの自分が、一様に、総すかんで食らわしている状態なんです。これもまた俄にわかに納得することなど無理な話です。

その人が、何らかのきっかけで、学びを知っていつて、自分なりに学んでこられたならば、やがて時が経たてば、「そうかもしれない」というふうになつてくるかもしれません。しかし、「そうかもしれない」という思いが、「そうだ」となつてくるには、それからまた、多くの時間を必要とするのだと思います。

たくさんの過去からの自分は、みんな、形の世界を本物とする土台を築き上げてきたのです。一生懸命に、形ある世界が本物だとする自分の世界を築き上げてきたのです。

それに対して、「私達は意識です。私達はみんな同じです」というメッセージは、せっかく築き上げてきたと思っている自分の世界を崩しなさいというものだから、それには、みんな、徹底抗戦の構えです。なぜならば、自分の世界が崩れるというのは、自分が崩れることになる、我一番の世界が崩れることになるからです。

まず、そのような自分の中の自分と対面して、自分の状態、すなわち、自分の今の実態を心で知っていくことから、始めなければならぬのですが、すでに、長い時間をかけて、自分の世界を築いて

しまったので、今は、その中で、固まった状態です。

外から、コンコンと木槌きづちで叩いているようでは、埒らちがあきません。少し、ひびが入っても、すぐに修復しようとはします。そういう点においては、機敏に反応していきます。形ある世界を本物だとして、その世界にしがみついている思いは、形が崩れていくことに、最も怯おびえます。

そして、「何も聞きたくない。私はこれでいい。この中がいいのだ。誰がここの主あるじを譲るものか」となかなか、その中から出てこようとはしません。しかし、私は神、私は王だと偉そうにしても、所詮しよせんは井の中の蛙かわずなんです。

しかし、その塊かたまりが何かの拍子で溶け始めると、今度は、この世の

常識とかそういうものは、完全に、度外視していきます。そういう人ほど、私は神だから、私は王だから、何を言っても何をやっても許される、我に従えの思いが、奇妙な行動を起こしていきます。考えられないようなことを起こしていきます。常識のこちら側からは、全く説明がつかないような事態になってきます。というふうには、肉で固まった人が、何の準備もなく崩れ始めると、一言で言えば、狂った状態を露あらわにしてくるのです。

一方、それを見た人、聞いた人、関係した人の中に、それは、自分達の世界のことだと実感する人が、どのくらい、いるのでしょうか。その人達もまた、固まった状態ですから、「あの人と自分は」と、絶対に区別していきます。それはあの人の世界のことであり、私には

関係がない、あの人と私が同じだなんて考えられない、と大体このようなところに落ち着きます。

ところで、確かに、「自分の心の中には、優しいところもあるが、その反面、悪魔か鬼のような部分もある」ということは、みんな、何となく分かっていると思います。しかし、自分の中に、たくさんの自分がいて、そのたくさんの自分とともに、今まさに私は存在している、はつきりと心で感じているかということになれば、どうでしょうか。

あなたは、過去世や来世ということを聞いたことがあるでしょうか。世の中には、人は生まれ変わるということを信じて、自分の過去世や来世を語る人もあります。しかし、そういう人達も、語るだ

けで、自分の過去世や来世とともに、今を生きているとは思ってもいないのではないだろうか。

また、仮に、自分は色々な顔を持っていて、そのどれもが自分だと自覚している人であっても、大抵は、そのような鬼か蛇か悪魔のような自分は、人知れず心の奥深くに留めておいて、外見だけを取り繕っていかうとするでしょう。別に特に善人ぶることはないけれど、誰も好き好んで、自分の評判は落としたくはありません。やはり、いい人というか、気配り、配慮があつて、人当たりのいい人、物分りのいい人、そのような人でありたいと思います。

そうやって、世間を渡っていく術だけを磨いていくのです。それが上手な人は、世渡りのうまい人となつて、結構、おもしろおかし

く生活していけるのでしよう。

しかし、本来は、そこに留^{とど}まっていたはダメなのです。周りと無用なトラブルを起こすことはないけれど、鬼か蛇^{じや}か悪魔のような自分を、しっかりと自分の中で確認しなければなりません。その作業が、外に向く習性のある心を自分の内に向けていく作業なんです。世渡り上手にならなくても、自分の中の自分と上手に付き合^あっていく術^{すべ}を習得すればいいのです。そして、自分の中の自分を充分に確認したうえで、夫や妻や、親や子の役を演じていけばいいのだと思います。自分の中の自分と上手に付き合^あう術^{すべ}を心得て、そして、それぞれの役を演じていることが、はつきりと自分の中で浮き彫りになってくれば、その人が醸^{かも}し出すものは、おそらく本当の意味で、いい人

なのだと思います。変に媚^こびずに、素直で、優しい、自分の自分の分が自然体で出てきます。

鬼か蛇^{じゃ}か悪魔のような自分の自分の自分も、温もりを通過して出てくるので、正真正銘のそれにはなりません。ということは、鬼か蛇か悪魔のような自分は、あえてトラブルを起こすようなことにはならないと思います。

また、夫だから、妻だから、親だから、子供だからと、ことさらに強調しなくても、相互扶助の中で生活していくことなど、簡単なことなのです。

自分の中のたくさんの自分を抑え込んで、自分は立派、私は正しいをいくらやってみても、所詮^{しよせん}は井の中の蛙^{かわず}、ちつぽけな帝国の主^{あるじ}

にしか過ぎない、なんてことを、私は常日頃感じています。

4 他力のエネルギーが染み付いています

他力のエネルギーとは一体何だと思えますか。

神、仏、宇宙のパワーが好きだという人はもちろんですが、それらを敬遠する人も、実は、心の中に神、仏、宇宙のパワーといった他力のエネルギーを充満させているのです。私達人間には、遠い昔から、そういった他力のエネルギーを貪欲どんよくに求めてきたという歴史があるんです。

考えてみてください。日常的に、拝んだり祭ったり、祈ったりとということがない人であっても、心の拠より所どころ、心の支えとして何かを

持っていますか。

昨今は、日本の国でも、宗教の世界が関係する事件なども起こっています。そういう影響からか、神や仏や、宇宙のパワー、そして、宗教と言うと、敬遠したり、警戒けいがいしたり、胡散臭うさんくさそうにしたりする風潮にあるかもしれませんが、実は、そういうものは、日常生活と密着している部分があります。心の拠より所どころ、心の支え、あるいは、慰めなぐさ、癒いよし、そういうものとともに、日々の生活があるように思います。それらが、自然に生活の中に溶け込んでいるのではなく、いでしょうか。あまりにも、生活に密着しているので、そういうことは、宗教だとは思っていないかもしれません。例えば、音楽などもそれに属すると思います。

また、生まれついた土地柄、場所においては、拜んだり祭ったり、祈ったりすることが、日常的になつていくという人達においては、それを生活習慣としてとらえて、宗教だという感覚はないかもしれません。

どちらにしましても、人はみんな宗教の世界、いわゆる他力のエネルギーを心に秘めてきました。限らない転生てんしやうの中で、他力のエネルギーを蓄えてきたのです。その人に自覚があるかないかだけであつて、みんな神、仏の世界を求めて、転生てんしやうを繰り返してきたことは、事実です。

にもかかわらず、宗教の好きな人、興味がある人、反対に嫌う人が、実際にあるのはどうしてでしょうか。

確かに、神、神の子、意識の世界、波動の世界という表現は、どうしても非日常的なものに感じる人は多いでしょう。

目に見えない世界、心で感じる世界というのは、大抵の人達は、二の足を踏むのではないのでしょうか。一般的に、後ずさりするような感じを持たれる傾向にあるのではないのでしょうか。神や仏や宇宙のパワーを好む人も多いけれども、宗教の世界を、即座に敬遠される人も、また、多いかと思うのです。

私自身も、この学びのことを、耳で聞いていただけの時は、宗教だと思ってきました。だから、足を踏み入れることを拒絶してきたと言ってもいいと思います。拒絶するということは、それだけ神や仏や諸々のパワーを、過去において求めてきたからだったと、私は

自分を振り返っています。

今現在の学びでは、意識の世界とか、波動の世界とか、そういうふうな表現になっているので、まだ入りやすいかもしれませんが、学びの最初の頃は、神とか神の子という表現をしていましたので、自分の中で距離があつたことは確かでした。

ところで、宗教の世界に、のめり込む人、何らかの関心を示す人よりも、反対に無関心な人、あるいは無神論者だとする人のほうが、他力のエネルギーが弱いのかと言えば、必ずしもそうではないと思います。

「宗教とは無縁だ。私はそのような世界に入りたくない」と頑かたくなに拒絶する心から、実際は、祈りのエネルギーが流れ出している、流

れ続けているのです。

本当は、そういう人達こそ、日々の生活から、少し距離を置いて、自分を振り返る時間を持たれたらいいのではないかと思います。

案外、なぜ拒絶してきたかということ、心で感じてこられたら、今度は逆に、どんどん真実の方向へ、自分を誘^{いざな}つていかれるかもしれません。

ただ、私達は、それぞれに、仕事、家事、子育て、学業、趣味、医者通い等々、日々の生活に追われています。その中で、自分の生活パターンを変えることは、なかなか難しいです。慌^{あわ}ただしく過ぎ去^つっていく時間の中で、束^{つか}の間の安^まらぎや幸せを求めていくことに明け暮れる毎日だと思います。

第一、自分を振り返るという意味が分からないと思います。だから、たとえば、振り返ってみても、生まれてから今日こんにちまでです。それで、何とか帳尻を合わせていこうとします。自分が求め、そして、自分の中に蓄えてきた他力のエネルギーをそのままにして、帳尻を合わせることなどできないけれど、染み付いてしまっているから、何とか、その瞬間瞬間を生きていこうとすることに、一生懸命なのだと思います。

今現在、占いや呪まじないや、その他、精神世界について興味がある人、神の存在を信じ一生懸命祈りを捧たさげている人、いいえ、そういうものはどうでもよく、ただ金、金の生活に忙しい人、人様々ですが、その区別なく、誰もがみんな、他力のエネルギーの中に沈んでいる

と言っていると思います。

そのエネルギーを、本来の喜びのエネルギー、パワーに変えていくことが、私達のこれからしていくべき仕事です。染み付いてしまったエネルギーを、どのように変えていくのか、大きな課題を残しています。

5 間違っているものは、いずれ音を立てて崩れていきますが、
今世はその手始めとと思ってください

間違っているものが、いつまでも大手を振ってはられません。
最初は少しずつ、少しずつですが、ある時にドーンと崩れて、やがて、
その方向を変えていくか、あるいは、崩れたまま、深い闇の中に沈
み込んでいくかです。

まず、今世はその手始めだと考えていただいていると思います。
非常に大きな分岐点です。だから、少しずつ、間違いに気付いた人
から、自分の軌道修正に取り組んでいくようになっていきます。その

5 間違っているものは、いずれ音を立てて崩れていきますが、
今世はその手始めとと思ってください

取り組み方法を、私達は、学んでまいりました。

長い間、間違い続けてきたことに気付かなかった私達に、今世、初めて、「真実はこうですよ、みんな間違ってきたのですよ」と伝えにきてくれた人がいました。

そして、私達も、自分の間違いに気付いて、今度こそやり直そうと決意して生まれてきたということは、確かなことですが、堅固な土台を崩す作業には、最初は時間を要します。

間違い続けてきた長い、長い時間があります。今世の僅かな時間わずの間に、真実が広く流布るぶすることは、はっきり申し上げて難しいです。私達は、あまりにも、真実の世界と遠くかけ離れてしまっているからです。

最初は要^{かなめ}作りでした。しっかりとした中心棒が必要でした。要^{かなめ}がぐらついているようでは、本当のことも、真つすぐに伝わっていきません。

手始めの今世には、まず、意識の目覚めがあつて、その中心部分を作るといふか、育てる時間が必要でした。そのように準備を万全に整えて、そして、ドーンと崩れていく時を迎えるのです。

今世は中心部分を確実に作るという意味がありますから、広く流布^{るふ}する必要性はあまりないと、私自身は思っています。しかし、
眞実は、人から人へ、心臓が鼓動するように伝わっていきます。

浅く広く流布^{るふ}していくこと、つまり、ただ単に、人を集めるのは簡単かもしれません。いいえ、簡単でしょう。欲心を刺激していけば、

5 間違っているものは、いずれ音を立てて崩れていきますが、
今世はその手始めとってください

また、興味心を突っつけば、何の造作もなく、人は集まってくるだろうし、もちろん、お金も吸い寄せることはできると思います。しかし、それでは、過去と同じ轍^{とつ}を踏んでいくことになります。根本的な誤りを正さずに、つまり、「意識の転回」をせずに、目に見えない世界を求めていった結果、どうなっていたのかは、私の心はよく知っています。おそらく、過去に苦い経験が山ほどあり、人集めで、金集めで、我が身を滅^{ほろ}ぼす悲惨さをいやというほど、味わってきたのでしよう。

今世は、大きな流れの分岐点です。私自身、今世は正念場だという思いを持って、この世に出てきました。

そして、過去の経験を教訓にしていかなければならないことを、

ヒシヒシと感じてきました。

今は、あえて、そういうことをしなくても、間違いは必ず正される、
時を待てばいいと感じています。

5 間違っているものは、いずれ音を立てて崩れていきますが、
今世はその手始めとってください

6 間違いだらけの人生

「みんな、間違いだらけの人生を歩んできました。」

一言、このように発すれば、

「どこがどう間違っているのだ。」

瞬間的に反発する人達もあるでしょう。一瞬にして反発してきます。

「私は、それなりに生きてきた」、あるいは「正しく生きてきた」、

もつと言う人は「立派に生きてきた」と、堂々と語るでしょう。そ

う思っている、また、そう語っている意識の世界が真っ黒なんだ、

だから間違いだらけの人生なんだと、誰が思うものでしょうか。

「確かに、間違いは山ほどしてきた、間違いだらけの人生だった、こんな私がここまでよく生かされたものだ。」

口でそう語り、また、本当にそのように思っていたとしても、その人の土台が、形の世界が本物だとするとところにあるならば、その土台の上で、ここは間違っていた、ここは正しかったと、判断しているに過ぎません。

こんなにバカだった私が言いながら、本当はバカだとも思っていないし、むしろ、よくここまでやってくることができたものだと、己というものをグッと前に突き出している波動を流されているのです。土台が肉であれば、それも当たり前のことです。

間違いだらけの人生というのは、そういうことではないのです。

形の世界を本物だと思っっているその思いが、間違っっているということなんです。それは意識の世界から見れば、真っ暗な思いなんです。自分の本質を間違っつてとらえるところからは、明るい思いは流れません。

本来は、明るくて、優しく、温かくて、柔らかな中であつた自分達なのに、肉体という形を持ったがゆえに、その形の世界を本物だとする思いをどんどん膨らませていきました。その結果、自分で真っ黒にしてしまったのです。真っ黒に正しくも正しくないもありません。そのところが、なかなか理解できないのです。

7 自分にこよなく愛され、許されて、今がある

「自分にこよなく愛され、許されて、今がある」ということも、実は、形の世界を本物としては、なかなか理解することはできません。

大抵の人は、「自分に愛され、許されている」ということを忘れ去って、自分でやってきた、自分の力でやってきた、生きてきた、頑張ってきたと思っっているといます。

中には、「私達は、愛され、許され、生かされているのですよ、感謝、感謝です」という人達もおられるようですが、まさか「自分に愛されている、許されている、生かされているとは理解されていない

いと思います。自分を愛し、許し、生かすものが自分の中にあるなんて、思ってもいないでしょう。

結局は、感謝、感謝と言いながら、その人達もまた、自分で生きてきた、自分の力でやってきた、頑張ってきたと語る人達と変わらないのです。世間では、自力と他力という言葉で、区別しているようですが、その両者は、根っこが同じなのです。

「自分に愛されている、許されている、生かされている」というところの「自分」を知らない心、自分を愛し、許し、生かす「自分」を信じていない心が、いわゆる他力の心です。その他力の心が根っこにあるという点で同じなんです。

人間は、目に見える自分（肉の自分と表現します）を自分だと思

込んでいるから、当然、その肉の自分のために、努力して、頑張っ
ていきます。

そして、肉の自分が幸せだと感じることや思うこと、嬉しい楽し
いと感ずることや思うことが、それがそっくりそのまま自分の幸せ
と喜びに繋つながっていくことを信じています。信じているというより
も、それしか知らないのです。肉の自分が今、心で感じている喜び
とか、幸せとか、楽しさとかしか知らないのです。

では、他に喜びとか幸せとかがあるのかと言えば、あるのです。
それも肉の自分が今、心で感じているそれらとは、「月とすっぽん」
の違いがあります。

それは、「本当の自分との出会い」がもたらす喜びと幸せです。

しかも、肉の自分が心に感じる喜びとか幸せは、そうそう長続きはしないけれど、こちらの喜びと幸せは、実に永遠に続いていくのです。

ただし、目に見える自分を自分だと思っただけでは、絶対に、本当の自分には出会えません。いいえ、出会えないようにしてしまっているのは、他^{ほか}ならない自分なんです。自分が邪魔をしているのです。目に見える世界しか信じようと思わない思いが邪魔をしているのです。そこで、こう言えるのではないのでしょうか。

「本当の自分と出会えない間は、偽りの自分しか知らないということ。その自分が味わっている喜びと幸せは一体何だろうか。そして、本当の自分が味わう喜びと幸せとは、一体どういうものだろうか。」

だから、私達は、その邪魔をしている自分を知っていくために、「心を見る」という作業をしてまいりました。その作業は困難を極めました。形の世界を本物と思う土台を崩すことは難しいと痛切に感じています。そうしながら、ようやく、どれだけ反省をしても、土台が切り替わらない限り、ダメだということが分かってきます。

だから、やり続けていく以外にないと結論が出てきます。それ以外に、自分を知っていく手立てはないからです。自分を知らずして、本当のこと、本当の世界は見えてこないことが、それぞれの心で感じてくるのです。

8 幸せを感じたいなら……

財力、権力、知力を手にしても、決して本当の世界とは巡り合えないことを、自ら気付いていかなければなりません。

それどころか、それらを手にすればするほど、全く逆方向に生きてしまう、本当の世界から遠ざかってしまうことにも、遅かれ早かれ気付いていかなければならないでしょう。

自らを地獄に突き落としてきた私達は、あまりにも愚かで悲しかったと、しみじみ思い及ぶことができたときに初めて、肉体という形を用意してきた私達ほど、幸せな存在はないと、つくづく思い知

ることができるとおもいます。

それは、一見、矛盾しているようですが、分かっただけでいえば、理路整然としています。

幸せを求めて、生きる喜びを求めて、日々頑張っている私達が、なぜ自らを不幸にしてしまうのか、なぜ自ら破滅はめつの道を選んでいくのか、誰にも解き明かせなかつた疑問だつたと思ひます。

「何が破滅はめつなものか。私は、これだけ幸せだ。これだけのものを手に入れて、今、まさに、我が世の春を満喫している」。しかし、有体ありていに言えば、自分自身を知らないままで、生まれて死んでいく人に、我が世の春は嘘つぱちだと思ひます。

その人から流れ出るものを感じることができれば、それは歴然と

しています。

語る言葉ではなくて、その人から醸^{かも}し出されるものです。それを波動と言いますが、その波動が、その人を一番適切に物語っているのです。

言葉や態度ではなくて、波動がその人を物語るというのは、私達人間は、意識、エネルギー、目に見えないものだから、それは当たり前のことなんです。しかし、形の世界しか信じない人には、それは分かりづらいことです。言葉や態度ならば分かります。だから、それらを重視します。とらわれていきます。

ただし、言葉や態度はいくらでも騙^{だま}せます。誤^ご魔^ま化^かせません。しかし、波動は騙^{だま}せません。誤^ご魔^ま化^かせません。だから、波動の世界を心で感

じてくると、おもしろいです。言うこととすること、そして、腹
の中で思っていることが合致していない場合があるのが分かるから
です。

ところで、みんな、幸せになりたいから祈ってきたのでしよう。
願いを込めてきたのでしよう。そして、すべての頂点に立ちたかった、
すべてを支配したかったから、戦い続けてきたのでしよう。

結果、どうなのでしようか。

心の底から、幸せだと言える人が、どれくらいいるのでしようか。
そして、祈り続け、願いをかけて、戦い抜いてきたことが愚かだ
であったことに、一体どれくらいの人が、自分の心で気付いているの
でしようか。その気付きもなのままに、だからこそ、今もなお祈り

続け、願い続け、戦い続けている中にあるということだと思っています。幸せを感じたいなら、祈りをやめることです。戦いをやめることです。しかし、やってみられたらお分かりになると思いますが、それは不可能なことです。

「祈り続けるエネルギー、そして、戦い続けるエネルギーは自分自身でした。そして、このエネルギーこそ、自分を苦しみの奥底に突き落としていました。いいえ、単に自分だけではなくて、私はこの真つ黒なヘドロのようなエネルギーを周囲に放射してきた愚か者でした。」

このように、本当に自分の心で気付くまで、祈りは続き、戦いは心の中で続いていくのです。

9 自分に聞いてください

人は、みんな、何かを求めて生きています。

自分を打ち込めるもの、自分を託すことができるもの、自分を賭けることができるもの、自分を必要としてくれるもの、そういうものを知りたいとか、そういうものに出会いたいとか、その願望があるのではないでしょうか。それが具体的に何かは、今一つ分からずに、ずっと模索中の人も多いと思います。

それでは、何もかも忘れて、没頭できるもの、集中できるものに出会っている人は、幸せだと思えますか。

家族のため、会社のため、社会のため、我が国のため、世界人類のため。ため、ため、ためと言って力を尽くすことが立派なことなのでしょうか。

それでは、同じためと言っても、自分のために生きようとする人はどうでしょうか。

普通、自分のために生きるというのは、とかく自己中心的なふう
に考えられがちです。そうではなくて、ここで言う自分のために生
きるというのは、自分の中に生き続けているたくさんの自分のため
に今を生きるということです。私は、このことが何よりも肝心なこ
とであり、これが抜けている人生など腑^ふ抜^ぬけの人生だと、自分の中
から伝わってきます。そして、それが分からないから、人はいつま

でもどこまでも彷徨さまよつていくのだとも伝わってきます。

「いい加減に目を覚ましなさい」と、世の中、狂つていくのです。とても信じられないことが、ある日突然起こっても、本当は何の不思議もないのです。みんな肝心なことを忘れ去ってしまったているからです。

私達は、過去から、何度も何度も、辛い苦しい目に遭ってきました。しかし、なぜ辛くて苦しい目に遭ってきたのか、全く分かりませんでした。そして、今世もまた、何とか幸せになろう、なりたい、今度こそはと生まれてきました。あなたは、その奥に秘めた悲しいまでに切ない思いを、どれだけ心で感じているでしょうか。

実は、今、悲しいことや、苦しいこと、辛いことがあるから、悲しい、

苦しい、寂しい、辛いのではなくて、そのような思いは、自分の中に抱えきれないほど、すでにあつたのです。今、降って湧いてきたものではなく、すでに自分が抱え持っていたものでした。

いいでしょうか。ここがポイントです。

悲しいとか苦しい、辛い、寂しいという思いは、人間だったら、そういう場面に遭遇そうぐうしたら、当然に出てくる思い、感情かもしれないませんが、それで終わったら、今世も過去と同じです。世間一般はそうです。「心を見る」ことをしなければ、そうです。「それが人生なのだ」「だから人生なのよ」と歌の文句ではないけれど、みんなそう思つて諦あきらめてしまふのです。「時が解決するよ」と自分を納得させていくのです。

諦めたらダメです。変に納得しないでください。

私達は、悲しくて辛くて苦しい暗い思いとともに生まれてきたのです。すでに、そのような暗い思いは自分達の中にあつたものでした。それらの思いと、どのように向き合っていけばいいのか、それが人生の最大の課題なのです。

思いの重圧に押しつぶされたり、そこから逃避とうひするだけでは、そして、ただ悲しい、苦しい、寂しい、辛い、と訴えるばかりでは、その人は、自分の人生を生きていることにはなりません。

苦しくてもいい、辛くてもいい、寂しくても、砂を噛むような空しさに狂ってもいい。しかし、人生を投げ出したり、狂ったりしたままではいけないのです。そこから、何を知っていくかです。そこ

から、どのように自分を見つめていくかです。そのために、自分に用意してきた時間が肉体を持っている時間、つまり、あなたの人生です。

人生を生きるとは、自分を見つめていくことです。一生懸命、自分に報いてやれるエネルギーを、自分の中で掘り出していくことが、自分を幸せに喜びに、そして、安らぎに導いていくことだと、私は思います。

「自分を自分で導いていく、暗い自分から明るい自分へ導いていくことができるパワーが、自分の中にあるのではないか。そのパワーこそが、ずっと私が切望してきたパワーではなかったか。」
私は、そう自分に問いかけてきました。

10 自分とトコトン付き合ってください

「私とあなたは、深い縁えにしで結ばれている。」

そうかもしれません。あるいは、それは、単なる思い込みかもしれません。しかし、本当は、そのようなことはどうでもいいことです。深い縁えにしであるかないかなど分からなくても、例えば、今、自分の身近にいる人達を通して、私は何を知っていけばいいのか、何に気付いていけばいいのかを考えていくことが大事なことです。そして、そこには、本当の世界を知り、本当の自分と出会うチャンスがあるだけです。だから、ありがたい人達なのです。唯一、自分の世

界を見ることができず、チャンスを作ってくれている人達なのです。それを、互いに、夫婦や親子などの繋がり^{つな}としてしか見ることができなくて、そのような繋がり^{つな}から心を離すことができないのは、大変残念なことだと思います。

肉体を持って存在している時間は、いつも、自分（偽物の自分）の世界から、自分（本物の自分）自身を自由に解放していくことができるか、できないかの、二つに一つを選んでいく時間でした。

どんな人生にも分かれ道、つまり、岐路があります。過去は、ずっと、その分かれ道において、後者をみんな選んできました。自由になりたいと願いながら、自分（本物の自分）を小さな枠の中に押し込めてきた。つまり、自分を形あるものだと思い続けてきたのです。

私は自由だ、心は自由だと叫んでみても、自由の意味を履^はき違^{ちが}えてきたのでしよう。

しっかりと自分を見つめていく目を持ちましょう。真実だけをどこまでも追究していく目は大変厳しいけれど、大変優しいのです。どの人の心の中にも、その目はあります。

その目を、真つすぐにとらえて、何をするために、この世に出てきたのか、自分の中をはつきりとさせることです。

仮に今、財を築いて名を残したい、自分の生きてきた足跡を残したい、それが自分の中から出てくる思いなら、私はそれもいいと思います。その思いにトコトン付き合ってください。自分の合点^{がてん}がいくまで、付き合ってください。付き合ってください、本当に

自分は愚かだったと心の底から気付いていけば、そこには、厳しくて優しい目があることに気付けます。

その目が、「真実の方向へ向きなさい」と伝えてくれていることに、心から気付けます。

もし、私自身に、今もその思いがあるならば、私は、きっとその思いに従って、自分の持てるエネルギーをみんなつぎ込んでいくと思います。現に、私はそうしてきました。今世も途中までそうでしたし、もちろん過去においては、疑う余地ありません。自分の世界を築きたかったと、自分の幸せのために、自分の喜びのために、ずっと戦いのエネルギーの虜とりこでした。

「行き着くところまで行かないと、絶対に分からない。」

「自分の心で分からなければ、どうすることもできない。」
それが実感としてあります。

11 生き様に優劣は付けられない

性格がひねくれているとか、いじけているとか、言うこととすることが全く合っていないくて、それなのにいつも偉そうにしている人達は確かにいます。この人、一体何を考えているのかと言いたくなるような、人物評価をすれば、間違いない落第点が付くと思われるような人もいます。逆に、素直で明るく、誰からも好人物だと合格点をもらう人もいます。

人間的に合格点が付いたからいい、落第点だからあの人は、というのを、今、少し横に置いておいて、その人の土台というところに、

ポイントを置けば、どちらも、真実から遠くに離れているという共通点があります。

形の世界が本物であるとする土台に立ってはいは、人物評価では合格点がもらえても、真実の世界では合格点はもらえないことになります。

ところで、人物評価云々もそうですが、何を思い、どう生きていくか、言ってみれば、その人の生き様についても、優劣は付けられないと思います。その人が、真実を知らなかったならば、その生き様に優劣など付けることはできません。それは、みんな愚かだったと、それで片が付くからです。

しかし、実際にはどうでしょうか。

あの人は立派、何とかの鏡と崇めたり、反対に、人間のクズ、社会の掃き溜めと切り捨てていたり、色々な間違いを、私達は犯してきたと思うのです。

本来は、お手本となるような人もいなければ、バカにして見下す相手もまた存在しないのです。みんな、一様にして、愚かな自分を抱えているから生まれてきたのだと、本当に自分の心で感じていたならば、あの人はどう、この人はどう、そして、私はどうだなんて、言っている場合ではないことが、分つてきます。

全部、それぞれがそれぞれに定めてきた予定のコースを辿っていると感じてくれば、しっかりと見ていくのは、自分だけです。自分の土台を見つめて、その土台を変えていこう、ただその思いだけで、

生活をしていけばいいのだと分かってきます。そして、自分の土台は自分でしか変えられないことも分かってきます。

そう思える自分が幸せだとなってくるから、当然、その生き様は変わってきます。周りの影響はあまり受けられないようになってきます。そして、今ある中で、自分を見つめていくことができる喜びが、その後の生き方に反映していくと思います。

生き様に優劣は付けられないというのは、形ある世界にのみ生きようとする生き方は、その人生が成功であれ失敗であれ、優劣が付けられないほど愚かだという意味です。

本当のことが見え出したら、どのように生きていけばいいのかは、簡単に分かってくるし、それに沿った生き様は、すべてにおいて「優

です。「劣」はありません。こちらは、そういう意味で、優劣は付けられないということです。

12 真の意味で、強い人間でないと、

真実を追究していくことなどできません

強い人間というのは、自分の本質が何であるのか、そのところから目を離さずに、信じて、信じて、信じ切っていくこうとする思いが、心の中から、マグマのように湧き出てくるまで、自分と真向かいになれる人を言います。豪傑ごうけつということではありません。

一方、弱い人間というのは、単に気が弱いか、気は弱いけれど優しいとか、そういうことではなくて、自分自身を信じ切ることができない人を指します。自分を自分で見限る冷酷さが、弱い人間に

は分からないのです。

弱い人間は、気が弱いから、ダメだ、ダメだと落ち込んでいくのではなくて、自分を信じ切れる信が弱くて、自分に冷酷無慈悲だから、ダメだ、ダメだと、自ら地獄の中に落ちていくことを選ぶのです。

優しさは厳しさです。厳しさは愛です。自分に対する絶大なる信頼のもとに、愛が育はぐくまれていくのだと思います。

自分に対する絶大なる信頼、その絆きずなを深めていくことが、これからさらに望まれることだと、私は理解しています。

自分を見つめるために、生まれてきました。肉体を持つことは絶対に必要でした。自分を掲げるために、肉体を使うのではなく、肉体は自分を見つめるためにありました。自分を見つめるために、

肉体が必要だったことに気が付けばいいだけです。

もちろん、肉体を維持するために、社会の色々なことに対応していかねければなりません。今は、そういう社会になっているからです。しかし、今、自分は何のために、こうして肉体を持っているのかということが、自分の中で分かってくれば、その自分にとって必要なものは、すべて、整えられている、整うようになっていけることが感じられます。手許にあるもので、自分を見つめていけるようになっていけることを、しみじみと感じて、満たされていきます。心が満たされていき、安堵感あんどかんが広がっていきます。足りないもの、ないものを欲しい欲しいと求める思いが、段々と薄れていけば、逆に、すでにこんなに満たされていることを感じます。

形ある世界に生きていると思ってる間は、ないもの、足らないものばかりに思いが向きます。ないものねだりです。また、あってもあっても不足の思いが募っていきます。

それは、苦しみでしかありません。

自分（意識）のために、今、肉という形を持っていることがはつきりと分かってくれば、自分（肉）が自分（意識）を学ぶために必要なもの、それは経済的なものを含めて、すでにもう整えられていると分かってきます。自分（意識）を学ぶために、てもとふによい手元不如意などという事態は起こってきません。もちろん、それは単に、経済的なことだけではなくて、すべてにおいてそうだと感じます。

必要なものは、自分の周りに配置していきます。自分を見つめる

のに必要なものは、すべて揃えていくのだと思います。なぜならば、人は、自分（意識）のために、肉という形を持つからです。意識の流れの中にある自分を振り返れば、それは納得です。なぜ、こういうふうになっていくのか、答えは簡単だったのです。自分が全部計画してきたに過ぎないことが、分かります。

形を見れば、どんなに大変な状態であっても、「越えられないものはない」ということです。それが、実感として分かってくるのではないのでしょうか。そう感じれば、勇気百倍です。偽物の自分ではなくて、本物の自分を信じていこう、喜びとともに勇気が湧いて出てくると思います。

「これが、私が私に目覚めるのに必要なことだった。」

そのように本当に思えたならば、その人は、きっと幸せです。自分に自分があるがとうと言える、こんな幸せな時間は、今までになかったはずで。

13 母を通して

さて、私という事例を挙げて話を進めることにしていますので、まず、私は、母を語ってみることにします。

私は母が苦手でした。苦手と言っても、私を産んでくれた母親を単に嫌ってきたということとは、少し違います。

母は、世間の常識からすれば、まず合格点の母親だと思っています。決して、不良な母親ではありません。私には、母を嫌う理由がありませんでした。母から、特に不都合なことを受けた覚えはありません。例えば、家族を顧みないで自分勝手な行動をする、いわゆる自己中

心的な母親のとばっちりを受けてきたとか、今よくある虐待を受けたとかは一切なかったし、特に教育ママでも放任主義でもなかったので、母親に対して、不平不満があったわけでもありませんでした。

しかし、私は、母が苦手でした。母の目が苦手だった、母の目を嫌ってきたと言ったほうが、正解かもしれませぬ。

母が苦手だったというのは、母親が何かを言ったから、何かをしたからに起因するのではなく、あくまでも私の側がわの問題だったということは、薄々感じてきました。

私は、自分と母との間に、部厚い壁があるのを、ずっと感じていたのです。いつも私は、「母は、目で私を支配している」と思ってきました。そして、その目と出会うたびに、「私は、あんたとは違う」と、

私の心は返していたのです。私は、母の領域に組み込まれることを極端に嫌い、避^さけてきました。特にどうかいう母親ではないのに、なぜ、このような思いになるのかが、私には全く分かりませんでした。これが学びに集う前の私の思いでした。

そして、時を経て、母が苦手だった私が、「母に使ってきた思いを見なさい、母を思っでごらん」という学びの門を叩くようになりました。いいえ、叩かざるを得ない状況に、自らを追い込んでいったのです。そして、学びの門を叩き、自分なりに学ばせていただく中において、自分の中の態勢が整えられていたことを、私自身の心で知るようになりました。

それは、母が苦手だった私が、その母と向き合っで、自分を見さ

せてもらおう、私を産んでくれた母を丸ごと、そして、それは同時に私自身の愚かな部分を、みんな自分の心で全面的に受け入れていこう、ようやく、そのように思える私になっていったということでした。叩かざるを得ない状況に、自らを追い込んでいったということは、そういうことだったと納得しました。

だから、学びの過程において、母に向けて、そして、周りの人達に向けて、自分の出す思いがどれだけ凄まじかったかということを確認できても、私は、それで落ち込むということは、ただの一度もありませんでした。落ち込むどころか、さもありませんと、心にながってくるものは、納得と喜びだけでした。凄まじい思いと出会うことが、喜びであり、そのために、今という時間を用意してきたことを、

はつきりと知るようになったからです。

私を産んでくれた母親に対しては、思いがストレートに出ます。母親の反省の初期段階で、ノートに書きなぐった思いは、どれもこれもみんな自分を中心に据^すえての思いばかりでした。母親は、何々してくれて当たり前の人でした。だから、してくれたことよりも、してくれなかったことに対しての思いだけが、膨大に膨らんでいきました。それは、まさに、私が、他力の神々に対して使ってきた思いと、何ら変わるところはないと実感してきました。

ノートに書きなぐった思いは、やがて、自分の肉体を通して、エネルギーとして表現されていきました。

口から出る言葉は、「死ね、死ね」の連続で、どこまで、この「死

ね」が続いていくのかと思うほどでした。

私は、母を通して、自分の中に溜め込んできたエネルギーを、自分に感じさせていたのです。それで確認できたことは、私を産んでくれた今世の母親は、私自身が心に溜め込んできたこととは、何の関係もなかったということでした。

「母が何かを言ったから、何かをしたからではなかった。」

「母に思いをぶつけても仕方がなかった。」

「母の目が厳しいのではなくて、その目を見る私の思いが素直ではなかった。」

母を疎ましく思う自分が違っていました。

そして、自分を知っていくために、親と子の縁を結ばせていただ

いた事実と、私を産んでくれた、私に肉という形をくれたという事実だけが、最終的に、大きく私の中に広がっていきました。さらに、自分のエネルギーを感じていけばいくほどに、それらの事実が、どうしようもなく、ありがたいものになっていきました。

母と子、私達の今世の繋がりは確かにそうです。母と私は血が繋がっています。血の繋がりがよりも、もっと強い繋がりがあるのかどうなのか、定かではありません。

私が、ここで言いたいのは、繋がりが強いからどうということではなくて、本当に意識の世界を感じてくれば、その繋がりの中で、人としてのやるべきことは、きちんとするという方向に、自然になつていくということです。必ずそうなつていきます。

私は、ただ単なる親と子の扶養関係から、老いていく母親を看ていくのではありません。そんなことは、一人の人間としての最低のルールだと思っています。と同時に、やはり、真実の世界を心で知った喜びによって、自然に人は、そのようになっていくのだと思います。

ところで、昨今のニュースを見聞きしていて、私が一番やるせない思いを感じるのは、その最低のルールも守られないことです。なぜ、年端としはもいかない我が子を邪険にするのか、反対に、年齢を重ねて思慮分別もあるのに、なぜ、自分の年老いた親を邪険にするのか、その他、私には、理解に苦しむ部分も多々あります。もちろん、一方では、そのようなことは、今世だけの繋つながりの親とか子とか、夫と

か妻だけでなく、ずっと過去から引きずっているものがあって、様々な惨^{むじ}たらしい事件が起きているということは、百も承知しています。そういう繋^{つな}がりの中から、その人達は、自分を見ていくに過ぎないということも、承知しています。

そのような心の闇がボンボンと噴き出してくる時を迎えていることを、きちんと自分の中で把握できない限り、またもや、心の闇に振り回されて、人間関係のドロドロとした中に、自分を沈めていく結果となっていくことは、様々な事件を通して、はっきりと示されています。それは分かっているけど、何で、我が子を虐待できるのか、殺すことができるのかと思ってしまう。その他のこともそうです。何で、そんなことができるのかと、それらのニュースに接する

たびに、何か悲しい気がします。

今は、自分のエゴと欲と無知で、我が子を虐待したり、殺す母親が続出する時代となり、また、自分を産んで育ててくれた親を、邪険にしたり、死に追いやっていく時代となってしまうました。親子だけではなくて、夫婦でも友達でも、気に入らなければ、簡単に殺すし、面識のない人達にさえ、危害を加え、平然としています。

お金に狂い、欲にまみれた中で、犠牲となつていく命を思うとき、ここまで、人の心は失墜しているのかと感じざるを得ません。

もちろん、殺されたり邪険にされたりするには、されるだけの理由があります。加害者だけが責められるものではなく、そこには確かに因果関係があります。

しかし、今は、あまりにもその手口が残忍です。そういう意味で、心に巢食っている闇の深さを、感じています。

14 握にぎっているものを離すことが人生でした

意識の転回が進んでくると、それが自分の中で始まらない限り、どんなに時間を重ね、頑張ってみても、真実に辿たどり着くことができないことが、はつきりと分かってくる。

そして、意識の転回が進んでくると、時間をかけ、積み重ねた形を本物とする世界は、一瞬にして消え去っていく陽炎かげろうに過ぎなかつたことも感じます。

それらを心ではつきりと知るから、自分の中から、一つ、一つ、握にぎっているものを離すことをやっいていこうとするのでしよう。

「幸せや喜びは、しっかりと握にぎっていないければ、私の中から消え去っていく。」

「私を幸せに喜びに導いてくれるから、絶対この手を離すものか。」
「離させようとするものを、徹底的に排除していく。」

「この手の中に確実に入れるものが多ければ多いほど、幸せ感も厚くなるし、喜びも大きくなる。」

大真面目にそう思っていました。大きな思い違いをやってきました。もちろん、そこで、手にしようとするものは、楽しいこと、綺麗なきれいこと、嬉しいこと、輝いているものばかりです。汚くて、暗くて、無様なものは、なるべく自分から遠ざけようとしてきましたから、その心の状態は、本当にお粗末なものだったと、今なら分か

ります。そのような心の状態で、人生を頑張つて生きてても、幸せになるはずがなかったのです。

今は、心がつかんでいるもの、握にぎっているもの、それが少なければ少ないほど、そして、緩ゆるければ緩ゆるいほど、本物が見えてくることを知りました。

本物が見えてきたならば、握にぎつてきた自分、つかんできた自分が愚かだった、それだけでした。

そして、自分が愚かだったと気付けば、本物は、握にぎろう、つかもうとしなくても、すでに、そこに最初からあったことに気付きます。偽物を離せば、本物が自然に見えてくるのです。そして、偽物（形の世界）も、きちんと整っているのです。整えようとしなくても、

自分にとって必要ならば、整つてきます。

また、本当の自分の世界を感じていけば、きちんと整えられた形の世界でさえも、自分にとって必要がない時がくれば、そこから心を離していくことができるのだと思います。

形が崩れたから、仕方なく心を残して離すのではなくて、形が整えられていても、ずっと心は離すことができる。それは、本物を感じてこそできるのだと思います。形は形にしか過ぎないことを、はつきりと心で知るからでしょう。

本来、正しい軌道にある人は、日日にちにちの生活をしながら、つかんだ手を緩める、離すことを学んでいきます。

自分の世界と向き合うことができるということが、どれだけの幸

せであり、喜びである今なのかを感じていけば、お粗末な心の状態も、また、よかったなあとなってくるでしょう。

いいえ、お粗末な自分だったからこそ、本当の幸せや喜びを感じてくれば、すごい世界に自分はあることを、しみじみ知っていくと思います。お粗末な自分に、ありがとうしかないことが、実感できます。

15 あなたが欲しいものは何ですか

幸せも喜びも、私自身が求めてきたものは、みんな間違っていたことは、今は、はっきりしています。やはり、そうでした。みんな間違ってきたところからスタートすれば、何もかも自分の中で符合してくるのです。しかし、前にも述べたように、形ある世界が本物だとする土台の上に立っていれば、そのスタートの位置自体が分かりません。みんな、間違っていたことが、なかなか分からないうちか、認めることはできないのです。認めることができないければ、スタートは切れません。

しかし、大概の人は、自分自身は、とつくにスタートをしたと思っ
ています。もう今は、随分遠いところまでやってきただろう、こ
れだけ一生懸命してきたのだから、どれだけ立派になったかと振り
返ってみて、まだ全くスタートしていなかったことを知って愕然がくぜんと
する時があるかもしれませぬ。そして、その時はもう遅かりし、人
生の終焉しゆうえんの時かもしれませぬ。

一生懸命やってきたはずだったのに、実際は、足踏み状態、また
は、前進するどころか後退している状態である、ということをし、心
で知れば、「私は、自分を足踏みさせるもの、後退させるものばかり
を握にぎっていた。このまま死んでいくのは、あまりにも悲しく空しい」
と感じずにはいられないでしょう。しかし、それならまだいいほう

かもしれない。

どんなに華やかで煌びやかな輝きを発していても、所詮、その輝きは、すぐにくすんでしまうことを、心で知ることなしに逝ってしまうことほど、悲しくて空しいものはないと思います。

さて、あなたが欲してきたものを、今、あなた自身、その手の中に収めることができますか。

私は、できています。それは、完結する世界のことではないのですが、私は、私が探し求めてきたものに出会いました。本当のことに出会いました。

学びの中において、アルバートの世界、田池留吉の世界、母なる宇宙と、呼称は色々ですが、たった一つの真実の世界があった、こ

れだけが唯一の現実であり、本当のことでした。

「たまらない空しさや寂しさの中に落ちてきた私だけど、私は、今、意識の流れがあること、真実の世界に存在している自分であることが確信できたから、やはり、私は幸せ者だということになると思います。」

16 苦しんできた自分のために、どれだけ力を尽くしてきたか

「苦しんできた自分のために、どれだけ力を尽くしてきたか」と尋ねられて、返答ができますか。

「あなたが力を尽くし、エネルギーを注いできたのは、全部偽物の自分のためではないのですか」と言われたならば、どうでしょうか。様々な思いが伝わってきます。

「苦しんできた自分とは、何か。偽物の自分だと言われても、どこがどう偽物なのだ、私には分からない。」

「あなたの言うことは私には理解できない。それは、私だけではな

いはずだ。私の周りの誰に聞いても、こんなこと、理解できるはずがない。」

また、事件、事故などをテレビなどで見聞きしていると、同様に、様々な思いが伝わってきます。

「確かに、金だけで幸せになれるはずがないが、しかし、金がなければ、一日だつて生きてはいけけないではないか。」

「病弱な身体からだで、一体何ができるのか。」

「知能に障害があつたり、常軌じょうきを逸いっした精神状態だつたりでは、まともな社会生活を送れるはずがない。お気の毒だが、それも運命と諦あきらめてもらうより仕方がない。私は、お陰さまで、五体満足の身体からだに恵まれた。とにかく、一生懸命、自分が正しいと思つていること

をやるまでだ。」

「私の人生だ。だから、勝手気ままに生きてやる。誰にも何も言わせはしない。」

例えば、このような言い分、思い方には、極端な部分があるかもしれないませんが、しかし、口にこそ出して言わないだけで、ある程度うなず領けるといふ部分もあると思います。ただ、このような様々な暗い思いが心から出ていても、殆どほとんどの人達は無頓着です。だから、自分が苦しんでいるということが分からないのです。

ところで、「9 自分に聞いてください」というところで、「自分のために生きる」ということについて、少し触れさせていただきました。

ここで、もう一度、「自分のために生きる」さらに、「自分のために自分の持てるものを使っていく」ということについて、考えてみましょう。

実は、その基本姿勢が私の中で、以前よりありました。

「自分が自分に与えた人生は、自分が納得するように生きていきたい」その思いが強くなりました。そして、その思いは、今は絶対に間違っていないことを確信しています。

それは、私の中で、「意識の転回」が起こってきたからです。

土台が変わらなければ、いくら自分のために生きていきたいと思ってみても、それはエゴの中のことに過ぎないでしょう。ただ、手前味噌かもしれませんが、自分のために生きていきたいという思い

は、私の中で、ほぼ純粹だったと思っています。その純粹な思いが、今の私を導いてきたと、私は解釈しています。

私は、絶えず、いつも何かを探していました。自分が納得する何かを探していました。この世の常識にとらわれることなく、私が私にしてやりたいことを探し続けてきたから、よかったと振り返っています。

そうかと言って、私は何も特異な生活をしてきたものではありません。ごく普通に日々を過ごしてきました。しかし、今思えば、私の幸せや喜びの基準は、どこか、常識から逸脱していたと思います。社会の中で、家族の中で、それらを追求していく限界を、私は感じてきたのです。

それらには限界があったのです。行き止まりを感じてきました。どうしても、何かが欠けていると感じてしまうのです。しかし、では、どうすればよかったのか、何があればいいのか、ということとは、なかなか分かりませんでした。

言うまでもなく、人と人との繋つながりの中で、生活は成り立っています。人は、ひとりでは生きていけないでしょう。しかし、それは、私からすれば、あくまでも表向きの考え方に過ぎないのです。私の本音は、人はひとりだと思っています。そして、それは決して孤独な世界ではないことも分かってきました。人はひとりという本当の意味、そして、喜びが分かかってきたのです。

本当の自分の世界を追求していききたい、していこうという思いが、

私の中に根強く根深くありました。それがようやく、表面に顔を出し、その姿を克明に現してきたことを感じている今なんです。

「形の世界に、私の求めているものはない」、私の中で、この思いが確立していると言っても、言い過ぎではないと思います。

17 私と私の約束

心の中にある闇の暗い部分は、生まれてくることにより、動きが活発化してきますが、その成長は、もうありません。肥大することはなく、終息の時期に入っています。

それが、私の来世、二五〇年後の環境だと思っています。

来世は今世よりもさらにもっと最短距離で、真実を自分の中で広げていくだろうと思います。

今世の予習を踏まえているから、自分の中に、一直線で核心に迫ることができるのだと思います。

私は、今世も、自分の予定通りに、ほぼ最短距離で学んでまいりました。

今、自分を振り返るにあたり、私の環境が、真実を追究していくのに、申し分のないものだったことを実感しています。

その中に、私が学びに集ったタイミングというものがあります。これは、私にとっては、非常に大きなポイントでした。早くもなし遅くもなし、丁度いい時期に学ばせていただいたことに感謝です。

それから、自分なりに試行錯誤しこうさくごしながら学んできた結果、自己確立の道を確認可能なものとして、今は、その自己確立の障害となるべきものは何もない環境を設定しています。

ゆっくりと、ゆったりと、二五〇年後に思いを馳はせながら、楽し

みながら、喜びながら、我が行く末を見つめていく時間、空間に恵まれていきます。

これほどの幸せはないと思います。

己というものを顕示していくことは、過去のものになりました。いつまでもそうしては、到底真実の世界を知っていくことなどできないことを、感じているからです。

私には、そのようなことで道草を食っている時間はないことを感じます。

ひたすら、自分の中で対話を続け、そして、より純粋な世界を自分の中で広げていくことが、私と私の約束です。

もう、自分を裏切ることはしません。大いなる優しさ、温もり、

広がり、そのような自分であったことを知ったからです。

私は、流れています。絶えず、新鮮な空気を送り込んでくれる自分を感じ、本当にこの私とともに存在していくことの喜びを、実感します。

私を感じている世界からすれば、形の世界の様々なことが、本当に芥子粒けしつぶのように感じます。だから、その中にありながら、芥子粒けしつぶには左右されません。いずれ消え去るものであり、永遠のものではないものに、もう二度と自分を売ることはいしません。そして、芥子粒けしつぶの中だと知っているから、どんなにすごい思いを確認しても、私はびくともしないでしょう。揺れながら、振動を吸収しながら、よかった、嬉しい、ありがとうと、芥子粒けしつぶを包んであげる私が、最

終的にあります。

しかし、私は駆^かけ引きもしているようだし、損得も考えているようです。一応、そうですが、やはり、それもまたどこかで、パツと立ち消えになっていくように思います。そのように私は愚かですが、今はその愚かな私がとても愛しく思えます。

私は、一生懸命生きようと、もがいてきた愚かさを、十分に味わってまいりました。もう私は充分です。もがけばもがくほどに、欲すれば欲するほどに、底なし沼に沈んでいくことを知りました。

「底なし沼の恐怖や苦痛は、どれもこれも自分をそこから解き放すためにあった。」

「自分を苦しめているのは底なし沼ではなかった。」

「自ら進んで底なし沼にはまっていったことが苦しみだった、それが私の転生てんしょうに他ほかならない。」

そういったことを、私の心の世界は、きちんと、とらえていると思います。

形の世界は、区別差別の世界です。知力、財力の違い、容姿の美醜びしゆう、それらがあるから、心の中の汚いドロドロした思いを、まざまざと見ることができません。そういうふうには、物事をとらえる目を養すべっていく術すべを、今世の私は会得えとくしたのだと思います。

もちろん、二五〇年後に生まれてくれば、私は、区別差別の人間社会で、ある時期は苦しみます。その苦しみの種は、まだ私の中にあるからです。しかし、それが肥大化することは、もうありません。

間違った方向で物事をとらえる目は、ある瞬間に変化する、その体
験を経て、私は、ただ一直線に進んでいきます。それが、意識の転
回がなせる業わざなのだ、私自身感じています。

18 時が来たれば

時が来たれば、予定通り、筋書き通りに反応して、事は遂行すいこうされていきます。意識の流れとはそういうものです。その流れに逆流するのは、形の世界を本物としているからです。それでは、意識の流れに乗ることはありません。流れに乗ることはないということは、沈み込んでいくだけです。再び浮上することは、さあ、どうでしょうか。

と言つて、どこか違う世界にあるのではなくて、いつも同じ世界にいるのです。形の世界を本物とするところからは、こちらの世界

が分からないだけ、ともにあることが分からないだけです。

形の世界を本物とする思いは、自らがその間違いに気付き、その思いを、意識の世界を本物とする思いに転回する必要があります。

「形を通して、自らの苦しみ、間違いを見る、感じる、そこから、自分を解き放していく」、そういうことをしていくのが人生でした。

そうしていけば、生きていく意味も、何もかも全く違っていた、全くトンチンカンな方向で、幸せと喜びと安樂を得ようとしていた自分に気付くはずです。

気付けば、ただ嬉しくなってくるのです。喜びが、尽きることなく溢あふれていることを感じます。

意識の流れは、淡々と流れていきます。すべてをその中に受け入

れて、流れていきます。流れにそぐわないものは、自然淘汰しぜんとうたされていくのです。

形の世界を本物とする思いは、沈み込んでいき、浮上することは難しいという表現は、頭でとらえれば、理解できないことかもしれないかもしれませんが、これからの時間の中で、それは証明されていきます。

19 意識を転回すれば、もちろん、人間としても成長します

意識の転回をすれば、何が分かるのか、意識の転回をし始めてこそ、本当の喜びと幸せが分かります。

その過程では、ただただ真っ黒な自分だけが飛び出てきます。その作業が進むにつれて、真っ黒な自分がたまらなく嬉しい、愛しいということに尽きるのです。

自分は素晴らしい、私は正しい、間違っていない、悪いのはあいつだ、こいつだ、世の中だと思っっている自分の心を見れば、すべてを八つ裂きに行っているエネルギーの塊であることを感じていく

でしょう。八つ裂きという表現はどうでもよく、とにかくすごい、凄まじいエネルギーです。

正しい、間違っていない、私は偉い。本当に正しくて間違っていない、偉いのでしょうか。これからは、その答えとなるものが、どんどん自分に訴えてきて、自分を変える方向に行かざるを得ない状態になっていくのだと思います。

形の上で、色々なことが起こってくるから、人は何かを考え、何かを思い、そして、自分の来し方、行く末を思います。それが、本来の人間の姿だと思います。それで、根本的な間違いに気付くことは難しいけれども、少なくとも、愚かな自分を感じる時がやってくると思います。人智が及ばない大きな流れを、それぞれの心が感じ

ていったときに、人は必ず変わっていきます。私は、そのことが信じられるのです。

自分とは何か、こうして今あることが幸せだったと気付けたから、一人の人間としては、まだまだお粗末で、課題もたくさんありますが、お粗末ながらも、以前と比べれば成長をしていると、思っています。誠を尽くしたい。母親に、そう思います。

単に世間で言う親孝行ではありません。真実に触れた意識としての喜びを、形に表していこう、いききたいとする思いになっています。そしてそれが、母親に対して誠を尽くしたいという思いに繋がっていくように思います。

母は、私に肉体をくれました。この世に産み落としてくれました。

母は、愚かかもしれません。いいえ、愚かでしょう。

それは、私も同様です。しかし、私には、私を産んでくださったという事実だけがあります。

その事実の重みを感じながら、日々の生活を続けていくことが、私をさらに成長させるものだと、私は思っています。

「母と生活をともにしながら、その中で、自分の心を見つめていく。そして、意識の転回をさらに進めていく」、このような計^{はか}らいを自分のために用意して、そして、本当に自分自身が知りたかった世界と、さらに繋^{つな}がっていくことができる喜びを、私は間近に感じています。

20 平々凡々ながら、我が道を行きます

私は、口八丁、手八丁の類たぐいの人間ではありません。

優しい言葉をかけ、優しい態度を示し、互いに頑張っていることと声を掛け合う人は、とっつきやすいかもしれません。私は、どうもそういうことは苦手だから、とっつきにくいみたいです。以前から、「あなたの考かんがえていることが、私にはあまり分からない」と、母に言われてきました。

私は、面倒見はよくないし、逆に人から口はきを挟はさまれることも、あまり好みません。生真面目でもなく、几帳面じょうめんでもない、邪魔くさが

りで、面倒なことは嫌いです。多分に自己中心的なところがあります。

また、私は、どちらかと言えば、一匹狼に近いと自分自身を評価しています。それだけに、一つ間違うと、地獄の奥底に転落です。あまり人の言うことを聞かないからです。自分で納得しない限り、聞いているようで聞いていない、調子を合わせているようで、そうでない、そのようなところがあります。

しかし、それが、案外、学びを遂行すいこうしていくという点において、プラスに作用したと思っています。

一見、短所なところも長所に作用していったのは、やはり、自分の中に、真実に出会いたいという純粹な熱い思いがあったからだ、私は解釈しています。

「この世のどこかに、真実はある、必ずある。」

何の取りえもない私ですが、この思いを心に感じてきたというのが、ただ一点のいいところであり、すごいところと言ってもいいかもしれません。

その実現を見ることがないということは、あり得なかつたと確信している今、その思いだけが、平々凡々な私を導いてきたことを感じます。

また、その思いがあつたからこそ、多分に自己中心的な私であっても、何とか曲がりなりに、そして、大きなトラブルを起こすことなく、社会生活に馴染なじんできたのだと思います。

いいえ、それどころか、ただ我が道を行くことを許されているこ

とを痛感して、これほど幸せなことはないと、私は常々感じているところですよ。

社会のため、会社のため、家族のため、そんな大そうな心意気など、何もない私ですが、自分の痕跡をしつかりと見つめ、自分のこれからは、しつかりと見つめていこうとすることに、エネルギーを注いでいることだけは確かです。

また、私は、怖がりで臆病だけど、考え方はしつかりしています。自分の理念とか哲学を持っています。だから、あまり人に、世間に、なびいていかないでしょう。

もともと、私には、自分で選び、自分で遂行すいこうしているという思いがありました。それによって、自分に降りかかってくるものは、

自分で対処していかなければならない、結局は、何事も自分のことは、自分以外に解決はできない、自分が納得しない限りダメだ、転生てんしやうを重ねた結果、そのような思いを強くしていったのだと思います。

自分の理念、哲学が、今世ようやくにして、自分の中で納得できるものと出会えたということで、私自身、大変喜んでいきます。

今世、私達に本当のことを伝えてくれたのは、田池留吉氏という人でした。田池留吉という一人の人間を通して、真実の世界に触れさせていただいて、本当に感謝しかありません。

私は、田池留吉氏の伝えてくれたことを、心で理解していると思っています。意識の世界の私達は一つであることを、具体的に感じている、つまり、確信していることは事実です。

それは、決して曖昧^{あいまい}模糊^{もこ}なものではなく、「私達は一つ」だという私の感覚は、まさに明確なものであり、現実的なんです。

だから、二五〇年後の出会いはずあり、しかも、その出会いがあつて、すべては、そこから始まつていくことも、私は知っています。今世の出会いも、非常に大きな喜びですが、来世の出会いは、それにも増して大いなる喜びであることも、もちろん感じています。

そのような背景を抱えて、私は、田池留吉氏と接しています。私は、田池留吉氏を師と仰ぎ、鏡として自分の中に掲げる思いで、見ているわけではありません。そのような低次元で、田池留吉氏を見るといふことは、本当におこがましい限りだと思っています。私にとつて、田池留吉という存在は、その程度に留^{とど}まるものではないからです。

出合いは非常なる喜びです。ずっと探し続けてきたものを、単刀直入に端的に表現してくださいました。私の意識の世界に大いなる衝撃を与えていただいたのも、事実です。

そのことにより、私は、自分自身に目覚めさせていただきました。そして、今、自己確立の道を、淡々と歩んでいる幸せと喜びの中にあることを、確認しています。平々凡々ながら、今、その道を一步、歩む喜びに、私の中は湧き返っていると思います。

確かに続いていくこれからの時間の中で、それは、さらにより鮮明に、自分の中で感じていくことができるだろうと確信しています。

21 まとめ

さて、ここまで、「意識の転回とは何か」から始まって、「その作業は難しい」「なぜか」という説明を経て、しかしながら、「それをしなければ、本当のことが分からない」「それをするために、私達は生まれて、そして、死んでいくという転生てんしょうを繰り返してきた」といった事柄を、私自身の愚かさまじを交えながら、色々な角度から、語ってきました。

では、その難しい「意識の転回」は、どのようにすればできていくのかということが、皆さん、一番関心があることだと思えます。

しかし、残念ながら、手っ取り早い方法もなければ、裏技もありません。あるのは、ただ一つ、「心を見る」作業を丹念に繰り返していくことです。

この作業がない人には、「意識の転回」はできません。

なぜならば、「形ある世界が本物で、それがすべて」だとする中で凝り固まっているからです。凝り固まっている以上、どうしようもありません。少なくとも、「心を見る」作業を真剣にやろうと思う人は、まだ今は、「形ある世界が本物で、それがすべて」だとする土台の上かもしれませんが、その土台が微かに揺らぎ始めているのだと思います。

そこで、「心を見る」作業というのを具体的に語ってみますと、自

分を振り返って、反省すべきところは反省して、自分を正していくことが、「心を見る」作業ではありません。「心を見る」とは、その作業を通して、自分のエネルギーを感じていくことです。「私はエネルギーだ」ということを、実感していくことです。

まず、自分を産んでくれた母親に対して、どのような思いを広げてきたか、包み隠さずに、奇麗事に終わらないように、自分の思いをできる限り、出してみることから始めなければなりません。出してみるといっても、むやみやたらと外に向けて出しても、無用な卜ラブルの元です。

つまり、自分の不平、不満、その他諸々の思いを、例えば、目の前にいる母親に向けて直接に吐き出せば、まだ、その段階では、必

ずトラブルが起こってきます。

互いに、「心を見る」作業をやっているとするならば、その中では理解されるかもしれませんが、それ以外では難しいです。無用なトラブルの收拾に時間とエネルギーを割くのは、得策ではありません。

とりあえずは、ノートに思いを書いてみる、書きなぐることを、やってみましょう。満点の母親など存在しません。そして、みんな母親には、自分の思いがストレートに出ているはずなのです。実際にやってみれば分かると思いますが、母親に使ってきた思いは、自分の周りの人達みんなに使ってきた思いなのです。だから、母親の反省です。セミナーに集われた人達は、このことを何年もやってこられました。

それと並行して、それぞれの宗教遍歴を振り返ります。宗教遍歴という大げさなものではなくても、例えば、誰でも、墓参りの一回や二回は、したことがあるでしょう。お墓の前で、または家の仏壇の前で、手を合わせて、どのような思いを出してこられましたか。あるいは、人によつては、太陽を見て拝み、そしてまた、夜空に輝く星に願いをかけてこられたかもしれません。

とにかく、祈ってきたことや、願いをかけてきたことや、パワーを求めてきたことがなかったか、占いや呪まじないに興じてこなかったか、それらを思い出します。そして、なぜ、そういうことをしてきたのかと、自分に聞けば、必ず、何らかの理由が返ってくると思います。「助けてほしかった」「救ってほしかった」「不思議な世界を知りた

かった」「自分の思い通りになってほしい」、そうならば、幸せになれると思うからこそ、自分の肉体を運び、時には、半端ではないお金を出してきたのです。そのあたりの自分の心の中を、じっくりと見ていけば、どれだけ欲の皮が突っ張った自分であったのか、必ず自分で分かってくると思います。

何はともあれ、まず実践することです。

どんな時も、自分から出てくる思いを、自分の中で確認して、そして、ふっと丹田呼吸の一つ、二つをして、目を閉じて、今、確認したい思いに心を向けながら、「お母さん」と心の中で呼んでみてください。

「どうなる、ああなる、何を感じるか」は、ひとまず横に置いてお

いて、ただ、その作業を淡々と繰り返していくことが、極意と言え
ば極意であり、第一段階でしょう。

母親に使った心と、他力信仰に使った心を、丹念に、そして、あ
りのままに、自分の中で確認していくことをしていったときに、や
がて、ふと、「何で自分は生まれてきたのか」「自分とは一体何だろ
うか」「本当にこれでいいのか」と、改めて、そういうような様々な
思いが、心にどんどん過ぎります。それは今まで、何度も思い返し
てきたことかもしれませんが、ある時ふつと、そして、強烈に自分
に響いてくるのです。

チャンス到来とばかりに、自分の存在そのものが全く間違ってい
たことを、否が応でも知っていく現象が起こってきます。文中にも

記しるしましたように、それは、おそらく「人の生き死しに」に関わってくる現象だと思えます。そのチャンスをやまく活かすことができれば、それが第二段階となってくるでしょう。

本当に「心を見る」作業を、真剣にやってきた人は、そのあたりから、徐々に変わってくる兆きざしが見え出すのではないでしょうか。ほんの僅わずかかもしれませんが、それでも、その兆きざしが見え始めたというのは、自分の歴史の中で、大きな出来事です。

私自身も、拙著『ありがとう』の中で記しるしましたように、「人の生き死しに」によって、大きく方向転換を、自分自身に促うながしました。自分の計画だったと言えればそれまでですが、「形ある世界が本物で、それがすべてだ」とする思いの向きを変えるには、やはり、この現象

をおいて他にないと、私は思っています。

眞実は、自ずと自分の中から伝わってきます。自分の中には、間違はなく「本物の自分」、すなわち「眞実」が存在するからです。

そして、その「本物の自分」が「偽物の自分」を導いていることに、心から気付くには、もう天変地異という手段しか残されていないことを、私は感じています。

日々、安穩あんのんと暮らしている中では、「天変地異という手段しか残されていない」という言葉は、少々厳しくて乱暴な表現かもしれませんが、なかなか、現実のものとして受け止めることは難しいですが、意識の世界では、もうそのような流れになっています。いつまでも、形

の世界を握にぎっているわけにはいかないのです。形ある世界は、色々なところからどんどんその形を崩していきます。「とらわれている心を見てください」というメッセージを流しながら、喜びで崩れていくのです。

しかし、このことをいくら公言しても、今はまだ、殆どほとんどの人には理解できないことです。今の生活、今の家族、今の自分、それらをしっかりと握にぎっている状態の中では、無理というものです。

そうです。今の状態では無理です。だからこそ、これから様々な事柄が、しかも、予期もしない事柄、想像を絶する事柄が起こってくるのでしょうか。天変地異の嵐は、みんなに公平に平等に配分され

ていくことでしょう。

しかも、これから起こってくる天変地異には、「形ある世界が本物で、それがすべて」だとする思いを、一気に崩していくほどの巨大なエネルギーを蓄えています。

それを、今現在どれだけの人が、心で感じておられるか分かりません。

しかし、止めることができない、変えることもできない意識の流れの中で、真実を知っていくシナリオがそれぞれに用意されています。それを運命とか、宿命とかで片付けてしまっている場合もありますが、そもそも運命とかそういうものは存在しないと思います。すべてが自分で計画、予定してきた事柄です。決して偶然はありません。

せん。

また、運命に翻弄ほんろうされたという表現は正しくはないと思います。翻弄ほんろうされているのではなく、自分で翻弄ほんろうしているのです。「真実に目覚めなさい」と、自分が自分に言っているのです。

それが分からずに、何もかも運命のせいにしていくのです。言うなれば責任転嫁せきにんてんかです。そもそも、運命は誰が決めるのでしょうか。私達は、「運を天に任せる」と言います。また、「運命を切り開いて、困難を克服して、ようやくつかんだ栄光の道」というのもあります。片や任せる、片や切り開く、何かどこかおかしいと思いませんか。そうです。実は、私達は今、何もかもおかしい状態の中にあるんです。おかしい状態だから、おかしい結果が、あちらこちらから噴き出

してきます。それがこれからの時間に、特に顕著になつてくるのでしよう。「根本が違つています。真実に目覚めなさい」という呼びかけが、声高らかになつてくるということだと思ひます。

「真実は一つ」、その呼び声高らかに、ともに歩んでいこうとする意識の流れからのメッセージが、それぞれの心に響いていく日を、心待ちにしています。

毎日の生活の中に、しっかりと腰を下して根を張るのではなく、ただ、自分の意識の世界をしっかりと見るために、今、それぞれの環境の中に肉体を携たずさえていることを、知らなければなりません。

「なぜ、生まれてきたのか」「何をするために、この世に出てきたのか」、その答えが自分の中で、はっきりとしてくるにつれて、自分

が今、携たずさわっている仕事、自分の家族、自分の健康のこと、その他
自分の周りの事柄に対しての自分の思いが、変わっていくでしょう。
自分とそれらのものとの関わり具合に、変化が出てくると思います。
そうした時に、さらに、自分とはいかなる存在であるのか、はつき
りと、自分の心で感じられる時が、やってくるでしょう。

22 次元移行へ向かって、ともに歩みを進めてまいりましょう

読まれて、どうでしたでしょうか。

確かに、今、あなた自身、大きな節目を迎えていることを感じていただけましたでしょうか。

拙^{つたな}い表現ですが、私自身は、自分の思いを語らせていただくチャンスを得ましたことが喜びです。ありがとうございました。

……とここで、本書を閉じさせていたかどうかと思いましたが、この度、装いを新たに、見知らぬ読み人との出会いを待つ嬉しさから、もう少し、語らせていただきたいと思えます。

さて、「意識の転回」が自分の中で拂はかどつてくれば、自然と瞑想をする時間が楽しくなつてきます。

「21まとめ」の中でも、自分の中に上がってきた思いとともに、丹田呼吸の一つ、二つをして、お母さんと呼んでみる時間を持つことを実践してくださいと記しるしました。

実は、その瞑想の最後の最後は、田池留吉に心を向ける、合わせる、委ねる瞑想をする、そういう瞑想ができるようになりましょうという事なんです。

言うまでもなく、田池留吉とは、これまでに約二十年の間、セミナーを開いてくれた田池留吉氏です。

ただし、ここで言う田池留吉とは、その田池留吉氏そのものではなくて、田池留吉氏が指し示す方向にある意識の世界のことを言います。

つまり、田池留吉氏が私に心向けなさいというのは、あなたの中の心に向けなさいということなんです。

それは、私もあなたも意識、エネルギーであり、私達は、本来は一つの世界にあり、どなたの心の中にも、田池留吉の世界があるということなんです。

そして、心の中に田池留吉の世界があるということは、本当の自分の世界は喜びであり温もりだということです。だから、それを知らずに、あるいは信じられずに、自分の外に安らぎや癒しいやすを求めて

いくことは本当に愚かなことなんです。

「自分の外に、安らぎを求め、癒しを求め、温もりを求めていく心
を見てください。見ていきましよう。

安らぎを求め、癒しを求め、温もりを求めていく心とはどのような心でしょうか。寂しい心ではありませんか。満たされない心ではありませんか。

では、なぜ寂しいのか。なぜ満たされないのか。

物が溢れ、金が溢れ、人が大勢周りにいても、寂しい心、満たされない心があるのはなぜなのでしょう。

全く自分を肉という形と見て、その形の世界にある自分しか見え

ていないと認めざるを得ないのではないでしょうか。

形を本物とする物の見方、考え方の中には、寂しい心からも満たされない心からも、決して、自分を解き放つことはできません。それは、苦しいことではありませんか。そうです。その状態では、私は幸せだなんて心の底から言えるはずはないのです。

また、自分が本当の幸せだとか喜びが分かっているのに、人を幸せにすることなど絶対にできません。従って、幸せにしてあげましょうという思いがどれほど傲慢な思いなのか、そして、幸せにしてくださいという思いがどれほど無知な思いなのかということです。

「意識の転回」が自分の中で捲はかどってくれば、こういうことが手に取

るように分かってくる、自分の心に伝わってくるのです。

そして、そのような状態になって、さらに、あなたの心で感じ分かってくることがあります。

それが、この章のタイトルにもなっている、「次元移行へ向かって、ともに歩みを進めていきましょう」ということなんです。

「私達意識の流れが、この地球上にこのメッセージを伝えていく時間、あと三〇〇年です。

その三〇〇年の間に、たくさんの変地異を、この地球という星

は体験していきます。私達意識の流れは、この地球上に転生てんしやうしてくる意識達に次元移行へのメッセージを伝えていきます。それが天変地異なんです。その天変地異を通して、次元移行を遂行すいこうしていくメッセージを私達は流していきます。

私達は、エネルギーです。私達は、エネルギーとして流れています。そして、このエネルギーが、これからさらに仕事をしていきます。」

瞑想をする中で、この思いを私はしっかりと心に感じていきます。

肉、形を本物としている人達には、全く異次元のことだと思えます。信じられないと思えます。しかし、私の心の中には見えているんです。つまり、心に響いてくるんです。これから三〇〇年の地球上での出

来事を通して、私達がメッセージを送っていくことを、私は感じて
います。

また、私達は、「ともに歩みを進めていきましょう」「いつまでも、
いつまでも待っています」というメッセージも流します。

しかし、それを欲でとらえると、そのメッセージの真の意味が、
真つすぐに心に入ってこないことに注意してください。優しさは厳
しさを伴っていることが分からないんです。

「次元移行へ向けてともに歩いていこう」「いつまでも待っていま
すよ」というメッセージは、自己確立、独立独歩の世界を伝えてい
ます。

喜びから発せられたメッセージは、厳しさに裏打ちされたものな
んです。どうぞ、メッセージを心で味わってください。

それぞれがそれぞれの心で、しっかりと自分の道を見定めるこれ
からの時間です。どのように存在していくのか、どのように生きて、
どのように死んでいくのかは、それぞれにかかっています。

今、肉体を持っている間に、精一杯可能な限り、自分の心を見
て、瞑想をしていくことが、どれだけ自分に対する優しさであるのか、
愛であるのか、心で感じていつていただきたいと思えます。

生半可な学びではないことは、意識の世界を心で感じていけばい
くほど、知っていくでしょう。

欲で繋がっている間は、ただ厳しい、本当に厳しいだけだと恐れ

をなすか、反発するか、その程度でしかありません。

しかし、真実の喜びと温もりを心で知り、本当の自分の声を聞いていったならば、その厳しさこそが、本当の愛、温もりであると心に伝わってきます。

確実に広がっていく世界があります。その世界に自分達があるのだと分かれば、だからこそ、今という時、今という時間、そして、これからの時間が、どれだけ幸せな時間であるか、厳しさとともに喜びが広がっていくのです。

これから、約三〇〇年かけて、私達は、必ず証明してまいります。私の意識の世界は、その途上にあることを確信しています。それは、

天の声、神の声、そのような、ちっぽけな世界ではないことを、今世、私は私に伝えました。まさに、真実の世界から伝えていただいたことを、私はただ真つすぐに、遂行すいこうしていただくだけです。

今世は、その手始めだと記しるしました。今世を境にして、意識の境界は、大きく変わります。つまり、「意識の転回」を促うながす出来事が、どなたにもやってまいります。そして、その時、何を選び取つていくかは、それぞれの自由です。ただし、それは絶対的な自己責任を伴います。

その猶予期間は、これから約三〇〇年です。その後、この地球が存続しているかどうか、それは定かではありません。

ただ、私は、再び、この地球上に転生てんしょうしてくることはない、私

自身に伝わってきます。その思いとともに、私は私の世界に帰っていくのだと、心で感じている今現在です。

「意識は永遠なり、私は喜びです。」

意識の転回を、どうぞ、始めてください。

そして、本当の自分との出会いのために、これからあることを感じていってください。それは、喜びの道です。間違いなく喜びの道です。

どうぞ、どうぞ、ともにこの三次元を超えてまいりましょう。

塩川香世（しおかわかよ）

1959年3月大阪市に生まれる。

1991年3月税理士登録。

税務関係業務に従事、現在に至る。

著書／「ありがとう」意識の流れ姉妹編（2006.8）

「母なる宇宙とともに」I、II（2007.3）（2007.4）

「意識の転回」（2007.8）

「愛と死の真実」（2008.4）

「あなた、このまま死んでしまってもいいのでしょうか」（2009.5）

「第二の人生」—ラストチャンスです—（2009.10）

「意識の流れ」—増補・改訂版—（2010.5）

「その人、田池留吉」—田池留吉の世界—（2010.10）

「続 意識の流れ」—改訂版—（2010.12）

「宇宙の風」—私達人間は、死んで終わりでしょか—（2011.5）

意識の転回

2007年8月31日 ver1.0 発行

2011年7月25日 ver2.0 発行

著 者	塩川香世
発 行 者	桐生敏明
発 行 所	株式会社シルクふぁみりい 奈良県北葛城郡広陵町馬見北4丁目14-7 TEL 0745-60-2696 FAX 0745-60-3098

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

© Kayo Shiokawa, Printed in Japan 2011

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

田池留吉・塩川香世

意識の流れ 増補・改訂版

定価1000円 (税込み)

田池留吉・塩川香世

続意識の流れ 改訂版

定価800円 (税込み)

塩川香世

その人 田池留吉

定価1000円 (税込み)

塩川香世

宇宙の風

定価1000円 (税込み)

塩川香世

母なる宇宙とともに I・II

定価各700円 (税込み)

塩川香世

あなた、このまま死んで いつた、このまま死んで

定価800円 (税込み)

塩川香世

第二の人生

定価800円 (税込み)

人間は、過去より真実を求めてきました。しかし、実際は誰一人として、真実というものを知らずに死んでいきま。私達自身が真実に目覚めない限り、私達は救われたいのです。

これから世の中は、ますます混沌の度合いを増していきます。人々の心に眠る狂ったエネルギーが形に表れ、天変地異の嵐が吹き荒れていきます。すべて意識の世界が反映されていきます。

田池留吉という人名がついていますが、その人個人の世界という狭い世界のことではありません。田池留吉との出会いがあったからこそ、自分が生まれ生きてきたのか、心で知ることができました。

「あなたの中に、確かに宇宙は存在する。」あなたの中の宇宙というエネルギーが、あなたの肉を通して、あなた自身を本当のあなたへ目覚めさせていくのです。

宇宙とは、太陽系の惑星云々の形の世界ではなく、波動の世界なのだと思います。その宇宙とは、実は自分自身であり、私は宇宙そのものであり、宇宙とはエネルギーなのです。

私は、たったひとつの真実を求めて、今の時代に生まれてきました。そして、半世紀の時間を経過してきました。ようやく、辿り着いた真実の世界は、実に単純明快な世界でした。

第二の人生をこれから歩もうとされていらっしゃるあなた、そんなあなたに、今だからこそ、少し考えていただきたいことがあります。あなたは、何のために生まれてきましたか。

塩川香世

愛と死の真実

定価700円 (税込み)

塩川香世

ありがと

定価800円 (税込み)

本田せつ子

お母さん、ごめんなさい

定価800円 (税込み)

本田せつ子

母親のぬくもり

定価800円 (税込み)

本田せつ子

家族の風景

定価700円 (税込み)

本田せつ子

幸せへの道が開かれて

定価700円 (税込み)

桐生敏明

時を超えて伝えたいこと

定価700円 (税込み)

あなたは、これまで自分の死を考えたことがありますが、自分が死ぬ人が死ぬ、それは、どういふことだろうかと愛したことがありませんか。では命とは何でしょうか？

自分というものの本質を知らない人間は無知でしかないと思います。いくらかのよびに生きてきましたと語って、みても、本当の自分を知らなければ、自分を語ることはできないのでは……

あなたは何を求めていますか。自分にはないもの、与えられないもの、手に入れられないものを、羨み、恨み、親の矛先を生まれた環境に、そして母親に向けてきたあなたがいませんか。

近年、子供を取り巻く環境は狂っている。としか言いようがない状況です。その中で子供の問題も多発しています。子供の周辺で起る事柄は、いったい何を伝えようとしているのでしょうか。

家族の中でいさかいが始まるとき、そこには大きなエネルギーが働きます。相手を守る、よかれと思つて；でもその根本にあるものは、結局は、自分のためではなかったのでしょうか。

精神障害者とは、どのような人のことを言うのでしょうか。それは特別なことなのでしょうか。私は決して特別なことではない、誰でもその可能性を心の中に秘めている、そう感じています。

君の時代にも、まだ日本という国は存在するのだろうか。そして大切な人たちが会った国だ。この地で大切な人と出会い、大切なことを伝えられた。